

令和3年度
常葉大学 学生自主企画
とこは未来塾 -TU can Project

活動報告書



お詫びと訂正

令和3年度とこは未来塾 -TU can Project 活動報告書において、誤りがありました。ここに謹んでお詫び申し上げますとともに、以下のように訂正いたします。

正誤表

訂正箇所	誤	正
57ページ 最下行	ハンドブックは <u>97%</u> 、特殊詐欺 防止動画は <u>92%</u> が有効である	ハンドブックは <u>83%</u> が「有効で ある」と回答、動画は <u>80%</u> が有 効である
59ページ ④アンケート調査の 結果	ハンドブックは <u>97%</u> が「有効で ある」と回答、動画は <u>92%</u> が有 効である	ハンドブックは <u>83%</u> が「有効で ある」と回答、動画は <u>80%</u> が有 効である

常葉大学 地域貢献センター

目次

とこは未来塾 -TU can Project 概要 ······ 2

採択プロジェクト一覧 ······ 3

令和3年度採択プロジェクト 報告書・ポスター

1. あそぼうまなぼう小学生 in 夏休み	4
2. 巴川プロジェクト ~川を町の主役に!~	8
3. 番町伝承あそび交流プロジェクト 集まれ!とこひろば	12
4. サイエンスカフェ常葉	16
5. しづ茶フェス in2021	20
6. 世界の問題 SDGs を絵本と大学生で広げよう	24
7. 保育実習におけるリアリティシヨックをなくす高大連携プロジェクト -高校の保育コースのキャリア教育について考える-	28
8. 目指せ、天然記念物!! ~弁財天川の日本のハイビスカス!!~	32
9. アオハル!車いす冒険地図 in Shizuoka	36
10. 学内における情報スキル教育の支援プロジェクト 「学生の学生による学生のためのポータルサイト実践ガイドの制作」	40
11. 親子で学ぶスポーツ外傷対策（練習前から練習後まで）	44
12. 届け！地元の味 目指せ！健康増進	48
13. 小学生防災体験活動「たのしくあそまなぼうさい」の実践活動	52
14. 高齢者を守る！特殊詐欺被害防止ハンドブックの教材作成	56
15. からだを動かしたくなる仕掛けとイベントで子どもと街を元気にする！	60
16. 2020 東京オリパラ選手に対する観光情報を通じた相互交流の実践	64
17. 常葉大学生の野菜摂取量の増加を目指す仕掛けづくり	68

『令和3年度 とこは未来塾 -TU can Project』

「とこは未来塾 -TU can Project」は、本学の専門性及び地域の特性を活かして、地域社会・地域産業の様々な課題に学生が自主的・主体的に取り組むことを支援するものです。

1. 目的

学生ならではのユニークな「視点と発想」をもち、「熱意と創意」に満ちた自主的・自発的な取組に対し、大学から教員アドバイザーによる助言や活動資金の援助などの様々な支援を行う。大学が立地する静岡県を中心とした地域社会への貢献を果たすとともに、学生の若い力を地域の活性化に結び付ける。

2. 募集分野

(1) タイプA：開かれた大学づくりプロジェクト

キャンパス内で様々な地域交流活動を企画し、本学が標榜する「開かれた大学づくり」への貢献を目指す取り組み。

(2) タイプB：地域貢献・活性化プロジェクト

県内各地の地域課題の解決や地域活性化への貢献を目指す取り組み。

(3) タイプC：現代的課題解決プロジェクト

各種の研究開発や調査研究などを通して、社会的・公共的な課題解決への貢献を目指す取り組み。

3. 審査基準

- (1) 学生が問題意識を持ち、主体的に設定した明確な目的があること。
- (2) 本学の教育理念・3ポリシーとの関連で、意義が認められる。
- (3) 学内ないし地域の活性化もしくは課題解決が期待できる。
- (4) 多様なメンバーから組織され、適切な役割分担がなされている。
- (5) 明確な実行計画が示されており、着実な推進が期待できる。
- (6) 具体的かつ妥当な予算が計上され、執行計画が示されている。
- (7) 成果の見通しならびに成果還元の方法が具体的である。

4. 助成金額

1プロジェクトあたり15万円を限度とする。

令和3年度とこは未来塾 採択団体一覧

No.	キャンパス	タイプ	テーマ	グループ名
1	草薙	B	あそぼうまなぼう小学生in夏休み	リンク西奈2021
2	草薙	B	巴川プロジェクト ~川を町の主役に!~	2021小杉山ゼミ
3	草薙	B	番町伝承あそび交流プロジェクト 集まれ!とこひろば	稻垣ゼミ
4	瀬名	B	サイエンスカフェ常葉	村井ゼミ
5	水落	B	しづ茶フェスin2021	ミズオチ交流会
6	草薙	C	世界の問題SDGsを絵本と大学生で広げよう	Utopia
7	草薙	C	保育実習におけるリアリティックをなくす 高大連携プロジェクト -高校の保育コースのキャリア教育について考える-	山本睦ゼミ 2,3年
8	草薙	C	目指せ、天然記念物!! ~弁財天川の日本のハイビスカス!!~	浅見ゼミ
9	草薙	C	アオハル!車いす冒険地図 in Shizuoka	保育学部 赤塚ゼミ3年
10	草薙	C	学内における情報スキル教育の支援プロジェクト 「学生の学生による学生のためのポータルサイト実践ガイドの制作」	山田雅敏ゼミ B (経営学部・情報学ゼミナール)
11	浜松	A	親子で学ぶスポーツ外傷対策 (練習前から練習後まで)	真鍋ゼミ
12	浜松	B	届け!地元の味 目指せ!健康増進	栄養学科クッキー開発チーム
13	浜松	B	小学生防災体験活動 「たのしくあそまなぼうさい」の実践活動	3.11はままつ東北復光プロジェクト
14	浜松	B	高齢者を守る!特殊詐欺被害防止ハンドブックの 教材作成	木村ゼミ
15	浜松	B	からだを動かしたくなる仕掛けとイベントで 子どもと街を元気にする!	ぶれぐらラボ
16	浜松	C	2020東京オリパラ選手に対する観光情報を通じた 相互交流の実践	2020東京オリパラブラジル選手 ホストタウン交流プロジェクト (村瀬ゼミナール)
17	浜松	C	常葉大学生の野菜摂取量の増加を目指す仕掛けづくり	ベジとこ(野末ゼミ、三浦ゼミ)

タイプA : 開かれた大学づくりプロジェクト

タイプB : 地域貢献・活性化プロジェクト

タイプC : 現代的課題解決プロジェクト

あそぼうまなぼう小学生 in 夏休み（あそぼうあそぼう ABC）

所属：リンク西奈 2021

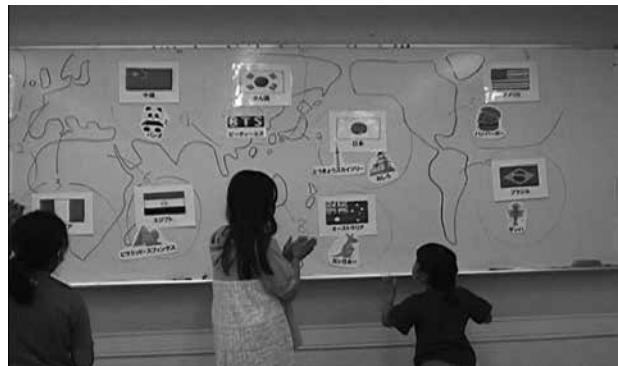
教育学部 村上 夏輝（代表）、鈴木 里安、村山 舞、田京 芳野、スミカワマユミ、鈴木早紀、
清 万利子、谷口 光平、堀内 美咲、森下 佳樹、田中 杏樹、鈴木 亜良太、
根本 安純、山田 真子、松浦 香乃、山本 花菜、鈴木 暖、鈴木 ひかる、
高塚 桃香、後藤 理花、大蝶 明日香、梅原 奈央、大塚 萌々

1. 目的・概要

急速に変化していく社会に対応できる子どもを育成するために、学校教育の在り方が今大きく変わってきた。我々がこれまで児童・生徒として体験してきた授業とは異なり、これから教員は「知識を教える人」ではなく、児童・生徒の「主体的・対話的で深い学び」を巧みに促すことが求められる。そこで本事業では、知識や理論に基づいた「体験的な学習活動」を提案し実践することにより、①我々学生は新しい授業の在り方・指導観を模索し検討すること、②参加者（小学3、4年生）は新しい学習観に基づく主体的・対話的で深い学びを体験し、学ぶことを「happy」であると感じてもらうこと、③保護者の方々には意欲的に学ぶ子どもの姿を見て頂き、教育への関心を高め、これから教育の在り方について考えていただくことを目指した。つまり、「主体的・対話的で深い学び」を、学生・児童・保護者がそれぞれの立場で体験することが本プロジェクトの目的であった。

2. 事業内容・方法

夏季5回（対面での開催3回、資料配信での開催2回）、冬季2回（対面開催）の計5回、小学3、4年生を対象に西奈生涯学習センターにて講座を開講した。夏季は「あそぼうまなぼう小学生 in 夏休み」というタイトルで、国語、社会、音楽、理科、算数を、冬季は「あそぼうあそぼう ABC」というタイトルで英語と国際理解に関する講座を行った。



＜第2回社会のときの学生と子供の様子＞

＜地域との連携＞

地域の小学生を対象に、本学教育学部の学生が講座を開講した。活動が主体の授業を行うことで、大学生と地域の小学生とが一緒に楽しみながら互いの学びを深めた。また、本事業は西奈生涯学習センターとの共催事業である。今年度は特に学生の問題意識に基づいて主体的な企画・運営を行い、より創造的な講座を開催することをご承諾いただいた。

<工夫>

学習指導要領の軸となる「主体的・対話的で深い学び」を実現できるよう、全ての活動を通して「体験的な学習活動」「Happyな学び」を目標とし、以下の3点を意識して講座を開催した。

①「Happy」：指導者・学習者の両者が楽しいと感じる学びを目指して、我々学生が笑顔と元気を前面に出し、明るい雰囲気の中で子どもに安心して学び合うことの楽しさを感じてもらう。（※感染対策には十分な配慮を行う。）

②「動き」：机上の学習だけでなく身体を使ったアクティブな活動を取り入れる。

③「発見」：学校では重きが置かれないような視点から授業を行い、ワクワクするような新しい発見・疑問につなげたり、生活に活かしたりする深い学びを目指す。

また、学習指導要領の改訂に伴い注目されている合科学習を積極的に取り入れ、その有効性を考えると共に、これからのおもてなしに求められる新たな指導法を模索する場とした。

3. 事業成果

夏季『あそぼうまなぼう小学生 in 夏休み』

【第1回 国語×英語】

日本語のオノマトペと英語のオノマトペを使った活動を行った。言葉だけでなくジェスチャーを取り入れることによって児童に動きが加わり、身体を使って楽しくオノマトペに親しむことができた。また、英語と日本語でオノマトペが異なることを初めて知った児童が多く、新しい発見となつたようであった。

【第2回 社会】

世界の国や世界遺産・各国の食べ物を扱った活動を行った。東京オリンピックが開催していたこともあり、子どもたちの興味にあった活動ができた。世界の国旗を紹介し、各国の遺産や食べ物の並び替えゲームを行った。自分だけの世界地図を作り、工夫して創作しており、主体的に活動できた。

【第3回 音楽】

難易度が異なるリズムを6種類提示し、そのリズムに言葉を付ける活動を行った。リズムに合わせて手を叩いたり身体を動かしたりすることで活動的な学びとなり、児童の個々の能力に合わせて音楽を楽しむことができた。また、他学年や他学校の児童と対話的に行う様子が見られた。

【第4回 理科実験】

実験を行う予定であったが、コロナの影響で中止となつたため、身近なものを加えて割れにくいシャボン玉を作るキットや、割れにくくなる理由を説明した資料を作成し、参加者に自宅で体験してもらった。子どもたちと一緒に実験を行うことはできなかつたが、オンラインでの活動方法を改めて考え行うことができた。

【第5回 算数×英語】

図形を扱った活動を企画したが、コロナの影響で中止となつたため、代わりとなるビデオと配布する教材資料を作成した。図形の英語での名称を当てるクイズや特定の図形を使って好きな形をつくるタングラムを用意した。子どもたちの反応を見られなかつたが、コロナ禍での新しい活動の仕方を見いだすことができた。

冬季

【第1回 英語×国際文化】

世界のクリスマス文化について扱った。導入では、「あわてんぼうのサンタクロース」を英語にして歌つた。本編では、夏期の第2回で扱つた世界の国旗を復習しながら、国名を英語で発音したり、その国のクリスマス文化のクイズを行つたりした。またクリスマスケーキを創作する活動を行い、オリジナルのケーキを作つてプレゼントした。

【第2回 英語】

導入は「We wish you a Merry Christmas」を、振り付けをしながら行つた。活動では、フルーツバスケットを行い、チーム名を英語で呼んでゲームをした。後半ではクリスマスカード作りを行い、各自送りたい人へ思いを込めて創作した。最後にサンタクロースが登場し、子供達へのプレゼントを配つた。

4. 今後の展開

本活動は、前年度以前も西奈生涯学習センターとの共催事業として、「あそぼうあそぼうABC」というタイトルで英語の講座を開講していた。その際は担当の教員が軸となり授業構成を考え、学生はその授業を実施・児童への支援を行つていた。しかし、今年度は特に学生の問題意識と主体的な企画・運営を尊重し、より創造的な講座の開催に向け合意を得て、本活動の目的や方針を再確認し、仕組みを一新した。具体的には、各回の代表の学生が授業内容や構成を考え、その他の学生はその授業を分担して実施・児童への支援を行つた。その結果、学生は前年度以前と比べて授業に見通しをもつて取り組むことができ、そして学生の想像力で様々な活動を生み出すことができた。また、新しい試みの一つである、児童が家に持ち帰ることができ、学びの履歴が残る創作活動は児童や保護者からも好評であったため、来年度も続けていきたい。来年度も新しい活動に挑戦をし、引き続き児童たちが主体的に参加してくれるような、楽しい学びの場を提供していく。

あそぼうまなぼう小学生in夏休み ～教師も子供もHappyな授業を目指して～

常葉大学 リンク西奈2021

代表:村上夏輝(教育学部初等教育課程3年)、有志ボランティア

はじめに

今回初めてとこは未来塾に採択された本活動は、前年度以前も西奈生涯学習センターとの共催事業として英語の活動を開催していた。その際は担当の教員が軸となり授業構成を考え、学生はその授業を実施・児童への支援を行っていた。しかし、今年度は特に学生の問題意識と主体的な企画・運営を尊重し、より創造的な講座の開催に向け合意を得て、各回の代表の学生が授業構成を考え、その他の学生はその授業を分担し実施・児童への支援を行った。その結果、学生は授業に見通しをもって取り組むことができた。

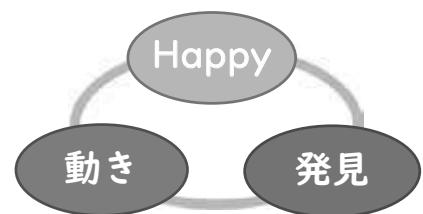
目的

「主体的・対話的で深い学び」を、学生・児童・保護者がそれぞれの立場で体験すること

- ①学生が新しい授業の在り方・指導観を模索し検討すること
- ②新しい学習観が完全に定着したとは言い難い教育現場で学ぶ参加者（小学3、4年生）に「体験的な学習活動」を通して主体的・対話的で深い学びを体験してもらい、学ぶことを「happy」であると感じてもらうこと
- ③保護者の方に意欲的に学ぶお子様の姿を見て頂き、教育への関心を高めてもらうことや親子間での会話のきっかけとなることを目指す。

授業構想の共通方針

- ①「Happy」：指導者・学習者の両者が楽しいと感じる学び
- ②「動き」：机上の学習だけでなくアクティブな活動
- ③「発見」：新しい発見・疑問につなげたり、生活に活かしたりする深い学び



第1回「国語×英語」

主担当者:村上夏輝

日本語のオノマトペと英語のオノマトペを使った活動を行った。言葉だけでなくジェスチャーを取り入れることによって児童に動きが加わり、身体を使って楽しくオノマトペに親しむことができた。

第3回「音楽」

主担当者:村山舞

リズムに合わせて手を叩いたり身体を動かすことによって活動的な学びとなり、児童の個々の能力に合わせて音楽を楽しむことができた。また、他学年や他学校の児童と対話的に行う様子が見られた。

第5回「算数×英語」

主担当者:スミカワマユミ

図形を扱った活動を企画したが、コロナの影響で中止となったため、代わりとなるビデオと教材資料を作成した。図形の英語クイズやタングラムを用意した。コロナ禍での新しい活動の仕方を見いだすことができた。

第2回「社会」

主担当者:鈴木里安

世界の国や文化を扱った活動を行った。東京オリンピックが開催していたこともあり、子どもたちの興味にあった活動ができた。自分だけの世界地図を作り、工夫して創作しており、主体的に活動できた。

第4回「理科実験」

主担当者:田原芳野

実験を行う予定であったが、コロナの影響で中止となつたため、身近なものを加えて割れにくいシャボン玉を作るキットや、割れにくくなる理由を説明した資料を作成し、参加者に自宅で体験してもらった。



冬季「あそぼうあそぼうABC」—世界のクリスマスー

主担当者:鈴木、鈴木、スミカワ

夏季の後半2回がオンラインでの開催となったため、保護者の方からの強い要望により、12月に世界の文化や英語を題材としたクリスマス会を2回分開講した。第1回は「世界のクリスマス文化について学ぼう！」をテーマに、夏季の第2回「社会」で扱った世界の国旗の内容を活用しながら、世界のクリスマスの文化について学んだ。第2回は「クリスマスの歌やゲームで楽しもう！」をテーマに、クリスマスソングに合わせて踊ったり、クリスマスカードを作成したりした。英語を使った遊びや創作活動を通して、子供たちに楽しみながらクリスマスの文化を知つもらうことができた。



課題・今後の方針

本活動をとこは未来塾に申請するにあたって、前年度以前から続いていた本活動の目的や方針を言語化することで、学生がそれらを再確認するきっかけとなった。目的と方針が明確になったことにより、以前より学生の主体性が増し、様々な活動を考案することができた。また、学んだことを家に持ち帰ることができる、創作活動は、児童や保護者に好評であった。しかし、初対面である児童同士の対話の動機付けや、より多くの学生の意見の反映などの課題も残った。これまでの課題を踏まえ、来年度以降も子供たちが主体的に参加してくれるような楽しい学びの場を提供していきたい。

巴川プロジェクト～川を町の主役に！～

所属：社会環境学部 小杉山ゼミ

社会環境学部 高内 琉南（代表）、川本 昇大、小池 未知、酒井 聖也、山下 大輝、鈴木 優斗
岩崎 勇介、木下 公貴、柴田 直也、田邊 菜々子、吉川 紗斗

1. 目的・概要

常葉大学が草薙に移転して、私たちは新しい調査フィールドの開拓を始めた。この過程で、大学のすぐ北側に3本の河川が並行して流れていることを確認した。川の名前を知ることから始めて、私たちは、この巴川が非常に興味深い川であることを知った。

すぐに、予備的な環境調査、文献調査を始め、3つの特徴を見つけた。第一に、上流の麻機遊水地を筆頭に、野生生物の生息場所として優れているということである。第二に、七夕豪雨の被害を含めて、長い歴史の中で大きく変化してきた川であるということである。第三に、洪水の危険性が高い川であるにもかかわらず、市民の注目度が薄いということである。

そこで、このプロジェクトでは、まず、住民に关心を持ってもらうための方法について議論した。その結果、特に「自然」と「歴史」に着目し、市民に关心を持ってもらうための散策マップの作成に着手した。

2. 事業内容・方法

本プロジェクトでは、巴川散策マップを作成していく上で必要な情報を得るために、巴川周辺や遊水池、放水路等について生物の生息状況調査を行った。

1. 魚、トンボの調査

魚の調査（写真1）を行い、外来種による影響がどのように出ているのかを調査した。

その結果、タモロコ、カダヤシ、ブルーギル、カワムツ、ウシガエル、タイリクバラタナゴなどが採れた。

麻機遊水池には様々な外来種も生息していることが判明したため、在来種に対して悪影響を及ぼしていると考えられる。

巴川の中流部にある大内遊水地で、トンボの種構成を調べた。その結果、多種類のトンボが見られた。しかし、麻機遊水池と比べると種数は少なく、今後、種構成を参考に、大内遊水地の環境の多様性を向上させるための提案を検討している。



写真1 麻機遊水池での魚類の調査の様子

2. 巴川流域の歴史

・江戸時代から残る史跡（江尻城、薩摩土手、横内川、等）

江尻城は1569年に武田信玄の指示で蛇行する巴川を用いて築いた城である。1601年に廃城となっており、現在は市街地化により城の跡形もないが、周囲には、大手町、二の丸町など、当時を偲ぶ地名が残っている。

薩摩土手は江戸時代初期に造られ、権限様提、火屋土手と呼ばれる。江戸時代以来、市民の生命と財産を守ってきたが、都市化の進行により残存する部分はごく一部のみとなっている。

横内川は400年前に家康公の名により駿府城建築の際に造られた川であり、荷物の運搬や農業用水、生活用水として利用された。しかし、交通量の増加に伴い昭和の頃に暗渠となり、今でも、鷹匠の北街道の真下を流れている。

・七夕豪雨の被害

七夕豪雨は1974年7月7日に発生した豪雨災害であり、24時間連続雨量は508mmを記録し、これは静岡地方気象台観測史上最高記録となった。

特に被害が大きかったのが静岡市内を流れる巴川流域(当時の清水市)で、各所で決壊・氾濫が発生するとともに崖崩れ・土砂崩れが発生し、死者27名もの被害が発生した。そのうち22名が土砂災害によるものであり、被害額は213億円となっている。

巴川においては流路勾配が1/750～1/50000と極めて緩やかであることが浸水被害を起こす要因となった。

※参照：静岡・清水地域の土地条件と災害

<http://takemizu.life.coocan.jp/kouza/area/06shizuoka/sizuoka.html>



<豪雨被害>

・様々な洪水対策（大谷川放水路、麻機遊水地、大内遊水地、等）

洪水対策を目的にいくつもの対策が講じられた。遊水地は、洪水時に低い土地を利用して水を引き込み、巴川の水位を調節することにより、下流へ流れる水量を減らして浸水を食い止める。また、雨水貯留施設である学校のグラウンドや公園、駐車場などに一時的に雨水をためて、川へ流れる水の量を調節している。



写真2 <大内遊水地>

3. アンケート調査

地元の人を対象に、巴川を知っているかどうかの聞き込み調査を行った。アンケートの結果、巴川を知っている人でも、「麻機遊水地」「大内遊水地」「大谷川放水路」について知っている人は少ないことが分かった。そのため巴川の散策マップは、地元の人に巴川とその周辺への関心を広めることに効果が高いと予想される。

4. 散策マップ

作成した散策マップを以下に示す。

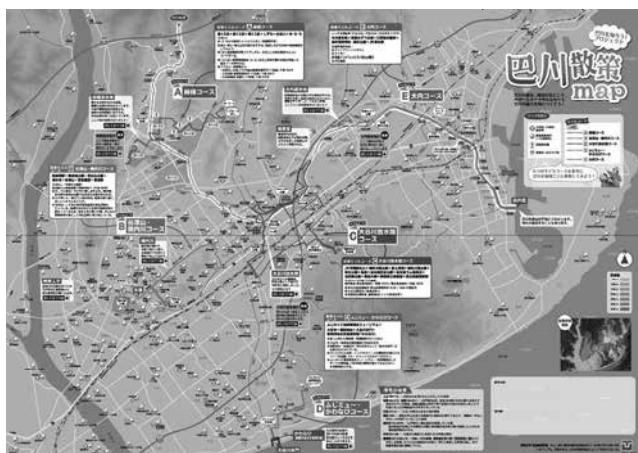


図1. 散策マップ 表面(制作中)



図2. 散策マップ 裏面(制作中)

3. 事業成果

当初は、完成した散策マップを地域の方々に配り、巴川について広める予定であった。しかし、コロナウイルスの影響によりフィールドワークを思うように行えず、情報収集が不十分であった。また、得た情報を上手く活用できず、情報収集や打ち合わせは、年度の後半に大きくずれ込んでしまった。そのため、散策マップを完成させることができなかった。外出できない状況下で、もっと臨機応変に対応できたのではないかと感じた。

4. 今後の展望

継続してイラストレーターの方と相談しながらマップを完成させ、地元の方々に配布し、巴川の良さを伝えていきたい。また、散策マップに書ききれない情報を、スマートフォンなどでも閲覧できるように、QRコードとGoogle ドライブ等を活用した、情報共有システムを作る予定である。散策マップを見て、市民が巴川に関心を持ち、日頃から巴川の状態に注目することが重要である。それが、七夕豪雨で起きた被害を、二度と起こさないための対策につながることを期待している。

巴川ってどんな川？

大学のすぐ近くを流れる「巴川」。昔に比べて川との直接的な関わりが減少し、多くの人々はこの川がどんな川なのかを知りません。そこで本プロジェクトでは、市民に巴川への関心を持ってもらいたいと考え、調査を進めました。

自然

・魚の調査

採集した175匹のうち152匹がタモロコでした。この魚の自然分布域は志太平野以西とされているので、移植によるものであると考えられます。



麻機遊水地での様子



トンボを捕まえる様子

・トンボの調査

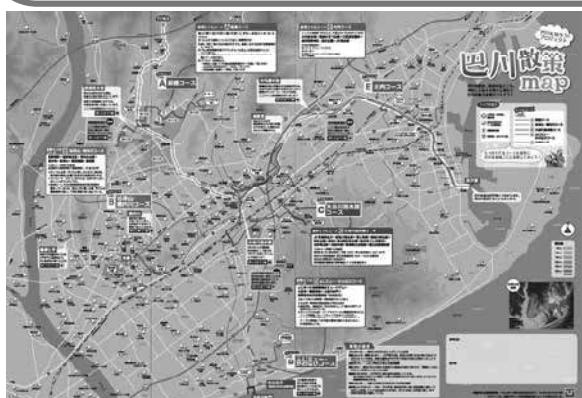
湿地環境を好むトンボは、環境指標生物として有効であり、大内遊水地には1年間で4科12種のトンボが見つかっています。これまで25種記録されている麻機遊水地と比較して種数は少ないですが、十分に多様性があると評価できます。



調査している様子

・鳥の調査

3年前から冬の調査を続けてきました。1回1時間の調査で、カモ類、オオバンなど20種類の鳥を見ることができました。



散策マップ(表)編集の途中

歴史

・江戸時代から残る史跡等

江尻城:蛇行する巴川を利用して造されました。

薩摩土手:権限様提、火屋土手とも呼ばれ、江戸時代の始めに造されました。

横内川:400年前、家康公の命により駿府城築城に際して造られた運河でした。



静岡県静岡市清水区周辺の地図。*静岡県静岡市木場務所河川改良課ともえらンドアラウラのすこばり川川・静岡県、今村在2月27日
<http://soboku.pref.shizuoka.ln.desit2/obisaku/zinogewawa/>(参照2021.11.22)

静岡・清水地域の土砂災害と災害
<http://tatemoto-life.coocan.jp/koushi-area/05shizuoka/zinuka.html>

・七夕豪雨の被害

1974年7月7日

24時間連続雨量は508mmを記録し、安倍川流域と、巴川流域(当時の清水市)で、各所で決壊・氾濫が発生するとともに崖崩れ・土砂崩れが発生し、死者27名もの被害が発生しました。

・様々な洪水対策

麻機遊水地・大内遊水地:洪水時に、低い土地を利用して水を引き込み、巴川の水位を調節することによって、下流へ流れる水量を減らします。

大谷川放水路:大谷川には水門が設置されており、津波や地震発生時に自動的にゲートが閉まる仕組みになっています。分流堰では、一定以上の水量になると30分かけて中の空気が抜けるようになっており、放水路に水を流す仕組みになっています。

※歴史の分かる地名

入江:海や湖水が陸地に深く入り込んだ所を指します。
江尻:「入江」の後ろにある土地の意味です。

上土:川底の土を河川から上げたことに由来します。

安西安東:江戸時代以前、安倍川の東にあるかないかで決められていた地名です。

アンケート調査

地元の人を対象に、巴川を知っているかどうかの聞き込み調査を行いました。その結果、巴川の名称や、過去に七夕豪雨で大きな被害があったことを知っていても、巴川周辺の「麻機遊水地」「大内遊水地」「大谷川放水路」の認知度は低いことが分かりました。

まとめ・今後について

本来であれば、地元の方等に散策マップを配布し、巴川について広める目的でしたが、未完成という結果になりました。緊急事態宣言の影響により、フィールドワークが上手く活用できず、情報収集などの活動を行うのが遅れてしまったと感じました。また、外出できない状況下でもっと臨機応変な対応をとれたのではないかと思いました。今後の展望は、イラストレーターの方と相談しながらマップを完成させ、地元の方に配布する予定です。



現在制作中のマップは、こちらをご覧下さい。



伝承あそび交流プロジェクト

—集まれ！とこひろば—

所属：保育学部 稲垣ゼミ 3年

保育学部 藤田菜摘 谷中園乃美（代表） 桑畠莉菜 小山悠乃 鈴木琉蘭 永田蘭 中山菜月海 藤浪実優 伏見夏帆 大井優奈 小林朋佳 近藤愛美 松下愛理 山田奈央

1. 目的・概要

本プロジェクトの目的は、忘れられていた地域の人的、物的な「遊びの資源」を再発見し、「遊び」を中心に地域の魅力を発信することであります。



子どもの遊び場の減少に加えて、新型コロナウイルス感染症の拡大により、地域の様々な行事が中止または縮小開催となり、子どもたちのみならず地域住民の閉塞感の高まりや、つながりが失われつつあることが懸念される。一方で家庭や地域等の身近な場所で手軽に楽しみを見つけ、安心して過ごすという、新たな生活様式も定着しつつある。子どもの遊びの場を地域の外に求めるのではなく、また身近な地域において「遊び資源」を発掘し、実際の遊びを通して子どもたちや地域にその魅力を再発見、発信していきたい。さらに子どもたちに対して、地域に残る伝承遊びの実際の体験を通して「遊び」の魅力を伝えることで、地域への愛着を深め、人々との結びつきを大切にする気持ちを育むことも目指したい。



2. 事業内容

1) 事業計画と実施内容

文献や資料から、静岡ならではの伝承遊びを調査した結果、袋井丸凧などの遊びはあるものの、いずれも子どもが短時間に制作から遊びまで楽しめるものではなかった。手軽に、身近な材料で制作可能な道具を使用する遊びに絞った結果、誰しもが昔遊んだようなわなげ、射的、あやとり、お手玉、ゴム跳び、ブンブンごま遊びに加えて、静岡県の地域の特産物や自然の特徴を盛り込んだ静岡巨大すごろくを、参加者と一緒に制作から遊びまで楽しむ企画とした。



またあそび道具の制作と並行して、昔の遊びの伝い手となる人材探しを行った。当初は、開催を予定していた地域のシニアクラブの方々の協力を頂けるはずであったが、新型コロナウィルス感染症拡大に伴い、開催地が変更となつたため、新たな地域で協力者の募集を行つた。コミュニティスクールである小学校に関わる放課後児童クラブのボランティアの方々や民生委員の方等を中心に声掛けをしていただいた結果、新たに開催予定の地域の高齢者の方数名の協力を頂けることになった。しかし一同に集まつての作業や打ち合わせの開催が困難であったため、当日事前の打ち合わせを行うのみとした。

(1) 「伝承遊びひろば」 常葉大学草薙キャンパス心薙祭 (2021年11月7日実施)

【参加者】

心薙祭来場者 59名（子ども20名、大人39名）

【実施内容】

当初の計画では、「集まれ！とこひろば」（以下、とこひろば）の後に学園祭での展示を計画していたが、新型コロナウィルス感染症拡大により時期と場所の変更を余儀なくされたため、とこひろばより前に実施することになった。

とこひろば開催に向けて、保育学部学生の専門性を活かしたあそび場作りと遊び道具の制作により、参加者体験型の展示を行つた。とこひろばより少ない数の展示であったが、大人の来場者にも遊びを楽しんでいただける場となつた。

続くとこひろばのリハーサル的な場として、来場者に遊び道具や見せ方の工夫の改良点について聴き取り調査を行つた結果、有用な意見を得ることが出来た。得られた意見を参考に、遊び道具については、場所の変更（校庭か体育館かなど）があつても対応できるよう、また多くの子ども達が遊んでも壊れにくいように、耐久性を高める改良を行つた。また子ども達が実際に遊ぶ場面を想定し、同じ場所に子ども達が集まらないよう、遊び道具をベース毎に設けてスタンプラリー形式で体験する方法とした。コロナ対策も含めて、子ども達がより多くの遊びに取り組めるための展示方法を計画した。

【ベースの種類】

わなげ、射的、あやとり、巨大すごろく、めんこ、お手玉の6種類であった。

(2) 「集まれ！とこひろば」 静岡市立中島小学校 (2021年11月24日実施)

【参加者】

参加希望者を募るために、学校からチラシを配布していただいた。来場者はチラシのQRコードを読み込み、Microsoft Forms から事前に申し込む方法を採用した。来場者は合計で109名、そのうち子どもは90名（1年生～3年生 65名、4年生～6年生 25名）、大人は19名（保護者7名、地域の高齢者12名）であった。

【実施内容】

コミュニティスクールとしての小学校を起点に、放課後児童クラブのボランティア、民

生委員、PTA 等、地域の方々のご協力により、予想以上に盛況であった。また富田ゼミも参加して、高齢者に向けて体力測定のブースも設置した。

【ブースの種類】

わなげ、射的、あやとり、静岡巨大すごろく、お手玉、ゴム跳び、ブンブンごま、体力測定コーナーであった。中でも、静岡県の名所や特産品を学びながら静岡県を巡る、静岡巨大すごろくが大人気であった。あやとりのブースでは、高齢者の方々は、最初は遠巻きに子どもたちの遊ぶ様子を見ていた方が多かったが、そのうち遊び方が分からぬ子ども達に、自然にあやとりのやり方を伝授する場面も見られた。



3.事業成果

私たちは当初「ゲーム世代の子どもたちが手作りの道具を使った遊びを楽しんでくれるのだろうか」と懸念していたが、アンケート結果では、参加した 97% の子どもが伝承遊び体験を楽しかった・まあまあ楽しかったと回答した。「ゲームはゲーム、でもこれはこれで楽しい。」と、子ども達は遊びに没頭し、次回の開催を切望する声も聞かれた。

アンケート調査の結果では、回答者のおよそ 69% が現代の家族形態の中心である核家族であった。核家族では世代間交流の機会が少なくなると言われているが、昨今の外出や人との接触を控えることにより、子どもの人間関係はさらに家庭環境のみに依存しやすくなると言える。また新型コロナウィルス感染症は、高齢者も外出の機会を制限され、人との交流の場は以前と比べて格段に減っていると推測される。今回場所の変更はあったものの、感染症拡大のはざまで実施にこぎつけることができ、多様な世代が交流する場を持つことが出来た。伝承遊びの伝い手として参加した高齢者であったが、遊びに積極的に参加し、遊びのコツや楽しさを子どもに伝授しながら、ご自身が楽しんでいらっしゃる姿が見られた。遊びを通じて世代が違う方々がそれぞれ生き生きと、自然に交流を楽しんでいた。遊びに熱中する子どもの姿から、改めてコロナウィルス感染症が子ども達の心に影響を与えていていること、また子どもが遊びに没頭する場やきっかけを作ることが、子どもの心身の健康を支え、地域の結びつきを作ることも可能だと考えた。

4.今後の展開

伝承遊びならではの特徴や魅力を活用し、今回のような「場」を設けることによって、地域や人とのつながりや高齢者の生きがいを取り戻す機会となり得る。制限下にあっても、積極的に活動を起こすことで、古いものに新たな価値を見出すこともできる。感染症対策には十分留意し、今後も地域をエンパワメントする活動を続けていきたい。



常葉大学
TOKOHA UNIV.

地域貢献・活性化プロジェクト 伝承あそび交流プロジェクト 集まれ！とこひろば

常葉大学 保育学部3年 稲垣ゼミ
藤田菜摘 谷中園乃美 桑畠莉菜 小山悠乃 鈴木琉蘭 永田蘭 中山菜月海
藤浪実優 伏見夏帆 大井優奈 小林朋佳 近藤愛美 松下愛理 山田奈央

目的と実践内容

昨今の新型コロナウィルス感染症の影響を受け、子どもの遊びは家庭ゲーム機や動画視聴などの身体運動の少ない遊びの割合が激増している。本活動では、遊びの場を失った子どもたちに、伝承遊びを通して地域の人々と交流する機会を作ること、また伝承遊びの伝い手である高齢者の生きがいづくりを目的とした。子どもたちが現代に受け継がれている伝承遊びの魅力を発見し、地域の人々との繋がりを大切にする気持ちを育むことをねらいとして掲げ、活動の中心として、遊びの場「伝承遊びひろば」と「集まれ！とこひろば」を実施した。遊びの伝い手である高齢者に対しては、交流活動を通してフレイル対策と生きがいを感じる場を提供することを目指した。新型コロナウィルス感染症の拡大により、活動時期の延期や実施場所の変更を余儀なくされたが、心齋祭の展示ブースと静岡市の小学校での伝承遊びのひろばを実施によって、当初の目的を達成することが出来た。



素朴な
手作り
おもちゃ

「伝承遊びひろば」常葉大学草薙キャンパス心齋祭（2021年11月7日実施）

【参加者】学祭来場者 59名（子ども20名、大人39名）

【内容】とこひろば開催に向けて、保育学部学生の専門性を活かしたあそび場作りとおもちゃの制作により、参加者体験型の展示を行った。とこひろばのリハーサル的な場であったが、おもちゃの改良点や見せ方の工夫について、参加者から有用な意見を得ることが出来た。意見を参考に、耐久性の面でおもちゃの改良を行い、より多くの遊びに取り組めるための展示方法も再考した。

【遊びブースの種類】わなげ、射的、あやとり、巨大すごろく、めんこ、お手玉

「集まれ！とこひろば」静岡市立中島小学校（2021年11月24日実施）

【参加者】来場者 109名 子ども 90名（1年生～3年生 65名、4年生～6年生 25名）、大人 19名（保護者7名、地域の高齢者12名）

【内容】forms登録による事前予約制。感染対策を万全に行い、備品や人員の配置を分散させるなどの工夫を行った。

コミュニティスクールとしての小学校を起点に、放課後児童クラブのボランティア、民生委員、PTA等、地域の方々のご協力により、予想以上に盛況であった。また高齢者に向けて体力測定のブースも設置した（富田ゼミ）。

【ブースの種類】わなげ、射的、あやとり、静岡巨大すごろく、お手玉、ゴム跳び、ブンブンごま、体力測定コーナー



大人気！静岡巨大すごろく

身体を使って無我夢中で遊ぶ
素朴な手作りのおもちゃで、自らの想像力を
生かして遊ぶこと

小学校 コミュニティスクール
核として地域をつなぐ学校
の存在

新型コロナウィルスで失ったものと
価値を再認識したこと



地域・人とのつながり
民生委員、ボランティアの協力
による参加呼びかけ 隣近所の声かけ
遊びを通しての生き生きとした交流

万全な感染
対策



事業成果と考察

新型コロナウィルス感染症は子どもの生活にも影を落としている。外出や人との接触を控えることにより、子どもの人間関係は家庭環境に依存しやすくなる。それに加えて、昨今の家族形態の中心である、核家族の家庭では世代間交流の機会が減少している。とこひろばで行なったアンケート調査結果でも、回答者のおよそ69%が核家族であった。子ども達のアンケート結果では、まあまあ楽しかった、という回答を含めると97%の子どもが伝承遊び体験を楽しかったと回答している。また伝承遊びの伝い手として参加した高齢者の中には、射的やあやとりなどに積極的に参加し、子どもに自然に遊びのコツや楽しさを伝授する場面が見られ、遊びを通じて双方が生き生きと交流を楽しんでいる様子であった。「ゲーム世代の子どもたちが手作りの道具を使った遊びを楽しんでくれるのだろうか」と懸念していたが、実際には、子ども達は遊びに没頭し、次回の開催を切望する声も聞かれた。子どもの姿から、改めてコロナウィルス感染症が子ども達の心に影響を与えていたこと、またこのような危機的な状況下でも、子どもは遊びに没頭するものであり、没頭するきっかけを作ることが、子どもの心身の健康を支えることが出来るのではないか。

子どもと伝承遊びの伝い手との交流

今後の展望と課題

自由度が高く、想像力を発揮して子どもが主体的に遊ぶことができ、世代間の交流の生まれる、伝承遊びの可能性が明らかになった。また伝い手から受け継がれる遊びであるため、子どもにとって自然に地域との繋がりを感じたり、多様性を知ったりする重要な機会にもなると捉えられた。また新型コロナウィルス感染症により、出かける場が制限されている高齢者にとっても、本プロジェクトのような場を設けることによって、地域や人とのつながりやコロナ自粛で奪われた生きがいを取り戻す機会となり得る。活動の実施自体、新型コロナウィルス感染症の状況に左右される面はあるものの、制限があるからこそ、失ったもの、価値を再認識できることの両面に目を向けることが必要ではないか。感染症対策には十分留意し、今後も地域をエンパワメントする活動を続けていきたい。

サイエンスカフェ

所属：造形学部3年・村井ゼミ

造形学部 大石 陽音（代表）、久保田 菜夕（会計）、鈴木 清一郎、青山 江湖、大屋 香帆
染川 華凜、増渕 文菜、澤井 三奈、浅田 萌笑
原賀 美空、川合 蒼葉、真野 陽太
新間 康亮、増田 理人、若月 優弥

1. 目的・概要

私たちの所属するゼミでは、昨年度の活動に引き続き、「サイエンスカフェ」という一連のプロジェクトを通して、「人と人との間のコミュニケーションをデザインする」コミュニケーションデザインを学んでいます。学生が主体となり、社会や地域における様々な課題や疑問に対して専門家の方と地域の方々との交流の場を設けることで、参加者が今まで知らなかった分野へと視野を広げることや、内容を通して自分にも何かできることはあるのかを考え行動するきっかけになることを本企画では目指しています。

「サイエンスカフェ」または、「科学」と聞くと多くの人が難しいイメージを抱くのではないかでしょうか。しかし、サイエンスカフェではそうした概念を一切取り除き、閉鎖的な空間ではなくゆったりとした空間の中で、飲み物を片手に専門家の方と参加者の方々が科学を切り口として楽しく対話しながら進行していくイベントになっています。テーマの題材は多様で、自由度も高く、普段関わる機会のない専門家の講師の方と直接交流できる開かれた場であるため、誰でも参加しやすいイベントとなっています。

また、サイエンスカフェを実施する学生にとって、イベントの企画から広報、集客、運営、報告といった“場”的デザインに関わる一連のプロセスを経験することができ、広報の際に使用するポスターやフライヤーなどの制作過程では、造形学部ならではのデザインスキルの実践的な活用や、将来コミュニケーションデザインを用いた企画に携わりたいと考えている学生にとって貴重な体験ができるのではないかと考えます。

2. 事業内容・方法

プロジェクトは、全体で、サイエンスカフェの重要な点の確認と実例を参照した上で、3つのグループに分かれて行いました。

1. テーマの決定・テイクホームメッセージを考える

テーマ設定では、静岡県に纏わるテーマや身近に感じている疑問など、グループごとに多様な視点からアイデア出しを行いました。また、テーマを絞っていく際には、参加者にとって身近なテーマであるか、主体的な学びを与えられる内容であるか、さらには、科学的な視点で課題を解決することができるかなどを考慮した上で1つのテーマに設定しました。そ

の後、会の実施目的の軸となるテイクホームメッセージ(参加者に持ち帰ってほしい重要なメッセージ)を設定し、内容を深めていきます。

2. 講師・内容の決定

設定したテーマに沿って講師の方を調査し、当日の交通面などを考慮した上で、静岡県内に滞在されている専門家の方を優先的に選出し参加依頼をしました。実際に、第3回サイエンスカフェ常葉では、静岡大学理学部地球科学・日本技術振興会特別研究員の谷内 元(たにうち はじめ)さん。第4回サイエンスカフェ常葉では、株式会社伊藤園中央研究所所長の衣笠 仁(きぬがさ ひとし)さん。第5回サイエンスカフェ常葉では、国立研究開発法人海洋研究開発機構(JAMSTEC)超先鋭研究開発部門准研究主任の渡部 裕美(わたなべ ひろみ)さんをお招きました。講師の方とは、主にメールでのやり取りやオンラインミーティングによる打ち合わせを重ね、講師の方の専門的な分野や学生が設定したテーマの共有、当日使用するスライド資料の作成や開催日程の調整とタイムスケジュールの共有など細かな調整を繰り返しながら進行していきます。一例として、第4回サイエンスカフェ常葉では学生が実際に伊藤園中央研究所を訪れ、お茶に関する様々な研究内容を共有していただき、プロジェクトの方針や内容についての打ち合わせを対面で行いました。



図 1 伊藤園中央研究所訪問の様子

3. フライヤー・パンフレット作成・イベント宣伝

宣伝用ポスター・フライヤーを作成し、配布と掲示を行いました。ポスターとフライヤーは、集客面に大きく影響するため、情報を把握しやすいレイアウトや印象に残るキャッチコピーの考案、配色などを意識してメインビジュアルの構成を考えています。掲示する場所は、より多くの方に興味を持っていただけるように、テーマや対象者に関わりのある施設や大学、会場近くの施設への協力をお願いしました。



図 2 実際に制作したフライヤー3種

4. サイエンスカフェの実施

開催日当日は、常葉大学とも関連のあるコラボレーションスペース Takt をお借りして、会場の設営から来場者受付、撤収まで4時間ほどで行いました。事前に作成した運営マニュアルに従って、役割を分担し、スムーズな進行を努めました。コロナ禍での実施ということもあり、徹底したコロナ対策の実施や参加者が安心してイベントに参加できる空間作りを工夫し、受付では検温とアルコール消毒、イベントのタイムスケジュールを載せたパンフレットの配布を行いました。イベント終了後には、アンケート用紙を配布しました。今回のカフェでは、集客面での効果が見られ、昨年度よりも多くの方々に参加していただきました。サイエンスカフェ自体は、休憩とアンケート回答の時間を含めて約90分



図 3 サイエンスカフェの様子

間で行われました。以下、実際に行われた当日のタイムスケジュールの一例です。

テーマ：お茶 「気づい茶った！～聞いて知る、飲んでわかる。多ーいお茶の効能～」

12:30～ 会場集合 / 12:40～ 打ち合わせ・会場設営 / 13:15～ 講師お迎え・最終確認

13:35～ 開場・受付 / 13:55～ スタンバイ

14:00～ 開会（挨拶・アイスブレイク・講師の紹介）

14:10～ 開演1部（生活習慣病の主な原因とコロナが及ぼす影響・お茶の効果や可能性）

14:36～ 休憩（試食体験で使用するお茶と出汁の準備・質問記入）

14:46～ 開演2部（お茶が日本食に合う理由・旨味体験・お茶を飲む習慣・質疑応答）

15:14～ まとめ（締めの言葉・アンケート記入・次回カフェの告知・講師へのお礼）

15:30 カフェ終了（来場者見送り・アンケート回収・写真撮影・講師の方へのお礼・お見送り・撤収作業）/ 16:30 撤収

5. アンケート集計・活動報告書作成

サイエンスカフェ内で回答していただいたアンケートを集計しました。アンケートの実施は、グループごとに決めた参加者へのテイクホームメッセージの達成度や広報や集客面での効果、サイエンスカフェ全体の満足度や改善点などを分析することで、企画立案から実装を行う中でこだわった点や工夫した点がどう活かされたかを理解し、反省点から得られた改善案を活かして今後の活動へと繋いでいく目的があります。

サイエンスカフェ終了後、各グループごと自身の活動の振り返りやアンケートの集計結果をもとに反省会を行い、活動報告書としてまとめています。

3. 事業成果・今後の展開

今回プロジェクトを進行する中で、コロナウイルスの影響による開催日の大幅な延期が生じ、本来予定していたスケジュール通りに進行することができませんでした。また、学生間でプロジェクトを進行していく中で、コロナの蔓延によるオンライン上でのやり取りが増えたことで、スケジュール調整や制作物の進捗状況など、対面での活動に比べて情報共有の難しさを知りました。しかし、昨年度の反省点としてあげていた集客面では、目標としていた参加者の定員数を満たすことができたことや、今回のカフェでは、静岡新聞の記者の方が興味を持ってくださいり、実際に11月15日の茶況コーナーという項目で第4回サイエンスカフェ常葉「気づい茶った！～聞いて知る、飲んでわかる。多ーいお茶の効能～」の様子が紹介されました。サイエンスカフェの文化を静岡県に根付かせるといった目的を持って活動している私たちにとって一歩前に進むことができた活動であったと感じています。

今回の活動を通して、学生は講師の方を含めた社会人の方、地域の方々とのコミュニケーションの構築や社会で役立つ実践的な学びが得られました。また、参加者の方々が少しでもサイエンスカフェに興味を抱き、あらゆるテーマに疑問を持ち、1人1人の自発的な行動につながっていくことを期待しています。今後も静岡県にサイエンスカフェの取り組みを発信していくことで、人々の学びの視野を広め、新たな交流の場を作っていくことができるのではないかと考えます。



〈プロジェクトの背景・目的・取組過程〉

私たちの所属するゼミでは、昨年度の活動に引き続き、「サイエンスカフェ」という一連のプロジェクトを通して、「人と人との間のコミュニケーションをデザインする」コミュニケーションデザインを学んでいます。学生が主体となり、社会や地域における様々な課題や疑問に対して専門家の方と地域の方々との交流の場を設けることで、参加者が今まで知らなかった分野へと視野を広げることや、内容を通して自分にも何かできることはあるのかを考え行動するきっかけになることを本企画では目指しています。また、サイエンスカフェを実施する学生にとって、イベントの企画から広報、集客、運営、報告といった「場」のデザインに関わる一連のプロセスを経験することができ、広報の際に使用するポスターやフライヤーなどの制作過程では、造形学部ならではのデザインスキルの実践的な活用や、将来コミュニケーションデザインを用いた企画に携わりたいと考えている学生にとって貴重な体験ができるのではないかと考えます。

「サイエンスカフェ」とは...科学と聞くと多くの人が難しいイメージを抱くのではないかでしょうか。しかし、サイエンスカフェではそうした概念を一切取り除き、閉鎖的な空間ではなくゆったりとした空間の中で、飲み物を片手に専門家の方と参加者の方々が科学を切り口として楽しく対話しながら進行していくイベントになっています。テーマの題材は多様で、自由度も高く、普段関わる機会のない専門家の講師の方と直接交流できる開かれた場であるため、誰でも参加しやすいイベントとなっています。



〈サイエンスカフェ開催〉

事前に作成した運営マニュアルに従って、役割を分担し、スムーズな進行を努めました。コロナ禍での実施ということもあり、徹底したコロナ対策の実施や参加者が安心してイベントに参加できる空間作りを工夫し、受付では検温とアルコール消毒、イベントのタイムスケジュールを載せたパンフレットの配布を行いました。イベント終了後には、アンケート用紙を配布しました。今回のカフェでは、集客面での効果が見られ、昨年度よりも多くの方々に参加していただけました。（以下、実際に行われた当日のタイムスケジュールの一例です↓）

第4回サイエンスカフェ常葉：『気づいて知る、飲んでわかる。多いお茶の効能～』

12:30～ 会場集合 / 12：40～ 打ち合わせ・会場設営 / 13：15～ 講師お迎え・最終確認
13:35～ 開場・受付 / 13：55～ スタンバイ
14:00～ 開会（挨拶・アイスブレイク・講師の紹介）
14:10～ 開演1部（生活習慣病の主な原因とコロナが及ぼす影響・お茶の効果や可能性）
14:36～ 休憩（試食体験で使用するお茶と出汁の準備・質問記入）
14:46～ 開演2部（お茶が日本食に合う理由・旨味体験・お茶を飲む習慣・質疑応答）
15:14～ まとめ（締めの言葉・アンケート記入・次回カフェの告知・講師へのお礼）
15:30 カフェ終了（来場者見送り・アンケート回収・写真撮影・講師の方へのお礼・お見送り・撤収作業）
16:30 撤収



〈まとめ・今後について〉

プロジェクトを進行する中で、コロナウイルスの影響による開催日の大幅な延期が生じ、本来予定していたスケジュール通りに進行することができませんでした。また、学生間でプロジェクトを進行していく中で、コロナの蔓延によるオンライン上でのやり取りが増えたことで、スケジュール調整や制作物の進捗状況など、対面での活動に比べて情報共有の難しさを知りました。しかし、昨年度の反省点としてあげていた集客面では、目標としていた参加者の定員数を満たすことができたことや、今回のカフェでは、静岡新聞の記者の方が興味を持ってくださり、実際に11月15日の茶況コーナーという項目で第4回サイエンスカフェ常葉「気づいて知る、飲んでわかる。多いお茶の効能～」の様子が紹介されました。サイエンスカフェの文化を静岡県に根付かせるといった目的を持って活動している私たちにとって一步前に進むことができた活動であったと感じています。今回の活動を通して、学生は講師の方を含めた社会人の方、地域の方々とのコミュニケーションの構築や社会で役立つ実践的な学びを得られました。また、参加者の方々が少しでもサイエンスカフェに興味を抱き、あらゆるテーマに疑問を持ち、1人1人の自発的な行動につながっていくことを期待しています。今後も静岡県にサイエンスカフェの取り組みを発信していくことで、人々の学びの視野を広め、新たな交流の場を形作っていくことができるのではないかと考えます。

しづ茶フェス in2021

所属：ミズオチ交流会

代表者：法学部 鈴木大也

1. 目的・概要

本プロジェクトの目的は2つある。1つ目は静岡県のお茶の現状の改善である。現在静岡県では、お茶農家の後継者不足・生産量の減少、またそれに伴い産出額の減少が挙げられる。産出額に関しては50年以上トップであり続けた静岡県だが2019年には鹿児島県に一位を譲る結果となってしまった。この結果には高齢化・後継者不足が大きく関係している。茶畠には急こう配な場所や機械での作業ができない所もあり、多くの人手が必要となるが、担い手は少なく高齢者のみでお茶の栽培を続けている農家もある。より多くの人にお茶への関心を持ってもらい、少しでも静岡県のお茶現状を改善することが目的である。

2つ目は商店街の活性化である。水落キャンパスは北街道沿いにあり、ミズオチ交流会は例年北街道周辺の商店街と連携したイベントを実施していた。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大にともない、2020年度には予定していたイベントは全て中止となった。さらにコロナ禍による自粛により、商店街への買い物客や、商店街を通り大学に通学する学生が減り寂しい印象であった。これらのことから本プロジェクトを商店街と連携したイベントとして開催し、商店街活性化に尽力するという目的がある。以上の2つの目的を達成するため、本プロジェクトを企画した。

2. 事業内容・方法

(1) イベント企画の変更

当初の予定では「しづ茶フェス in2021」は11月上旬から下旬にかけてのどこか2日間で静岡県内のお茶屋さんを10店舗ほど水落商店街へ呼び寄せ、ラテアートのワークショップやお茶の試飲、茶菓子の販売を通して商店街への集客やお茶の認知度の上昇を図ろうと考えていた。だが、コロナウイルスの感染拡大に伴いイベントを中止した。

そこで企画を変更し、お茶のイベントを行うのではなく県内のお茶事情について3グループに分けて調査することとした。

(2) グループ分けについて

グループは以下の通りである。

- 1, お茶マップ・おうち時間チーム
- 2, 県内のお茶の歴史・文化チーム
- 3, 県内のお茶産業・問題点チーム

(以降の記述は各グループを番号で記載する)

「1」グループはお茶マップの作成とコロナ禍のおうち時間でお茶を楽しむ方法について調査した。「2」グループは県内のお茶の歴史や文化について調査を行った。「3」グループは県内のお茶産業や問題点などについて調査し、問題点の解決策や鹿児島県との比較をおこなった。

(3) 発表日時

12月15日（水）中間発表（調べていることを簡単に報告を行いました）

1月19日（水）最終発表（サークル内で各チームの調べた成果を発表しました）

<発表風景>



※1月19日 最終発表時の風景

<地域との連携について>

今年度も商店街でのイベントが昨年に引き続き開催が叶わなかったため、しづ茶フェスの発表資料の資料提供等で勝山園さん、杉山園さんを中心とした大学近隣のお茶屋さんと連携ができたかと思う。イベントが商店街で開催できていれば商店街の各店舗の近隣にイベントスペースを設けることができたが、昨今の感染状況下では対面イベントの開催が難しく、イベントを通じた地域商店街との連携がとることがかなわなかった。来年の状況はまだわかりませんが、地域商店街とのつながりがなくならないよう、交流会メンバー一人一人が商店街とのなんらかのつながりを持てるようにしていかねばなと思う。

3. 事業成果

3 グループの調査により、静岡県内のお茶事情についていくつかの課題と可能性が確認できた。

課題としては、①お茶全般について若い世代を中心に、ペットボトルや缶で飲む需要が増加し急須でお茶を淹れる機会が減少していること、②高齢化が進み茶農家を引き継ぐ若

者が減少していること、またそれに伴いお茶の栽培を終えざるをえない茶農家が出てきていること、以上2点が挙げられる。課題①については、感染症が拡大する中で増えた「おうち時間」を利用して急須で淹れるお茶の魅力を伝えたり、お茶に合う静岡県を代表するお菓子を紹介したりすることで対策を講じることができると考える。また、課題②については、静岡県内各地で開催されるお茶イベントを通して、静岡茶の伝統や種類・特徴の多様性について周知することが解決につながる一つの方法であると考える。

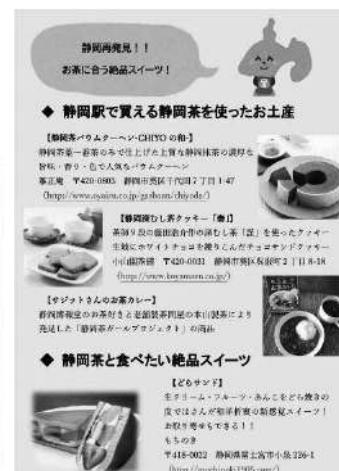
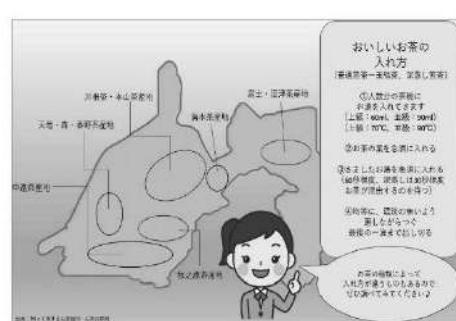
可能性としては、静岡茶を県外の人々にも広く知ってもらうことに対して感じた。前述したように、感染症拡大における緊急事態宣言や蔓延防止等重点措置を受け、多くの人が不要不急な外出を控え家で過ごす時間が増えた。この「おうち時間」を、急須で淹れるお茶の魅力・奥深さを知ってもらうことに有効活用できるのではないかと考える。静岡県には、それぞれに特徴を持ったお茶が多く存在する。そんな静岡県だからこそ発信できるお茶の魅力を、「おうち時間」を活用して多くの人に届けることで、静岡県の茶業が、感染症終息後の県の経済・産業回復につながると考える。

4. 今後の展望

今年度はコロナ禍により、地域との対面による活動を中止せざるを得なかつたり、最初に計画していたイベントが行えず変更を余儀なくされたりと非常に困難の多い年であったと思う。来年度に関しても今年度同様にコロナ禍によるイベントの開催が難しくなってしまう可能性があるが、今年度の「しづ茶フェス in2021」で調べたデータなどに基づいてお茶に関するイベントや企画などに役立てていきたいと思う。



作成したお茶マップ冊子 サンプル



①「はじめに」

静岡県は現在、若者がお茶を知る機会が減っていることが原因で、後継者不足などの問題が起こっている。そのため、お茶をもっと知つてもらう必要が十分にある。また、コロナ禍ということもあり、おうち時間が増えた現在、お茶を知つてもらういい機会であると考え、この企画を提案した。

②「背景」

静岡県は現在、お茶の生産量が鹿児島に抜かれ、第二位となってしまった。その原因是、後継者問題やペットボトル製造量等が考えられる。

③取り組み内容

(1) お茶マップ作製・おうち時間でのお茶の活用法紹介

静岡茶について、産地の特徴をそれぞれまとめた上で、茶の種類とその種類ごとのお茶の入れ方について調査した。

(2) お茶の歴史・文化を紹介

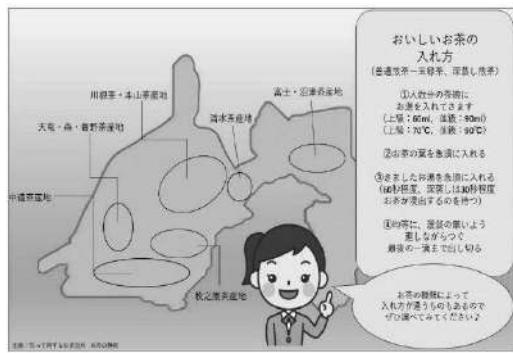
日本全体でのお茶発祥の歴史を調査した上で、静岡茶の歴史について気候や特徴に触れながらまとめ、静岡茶の産地ごとの特長について踏まえたうえで、県内でのお茶に関するイベントを地域ごとに分けて調査した。

(3) 県内のお茶産業・問題点紹介

県内のお茶産業の過去と現在を比較して、静岡茶の需要促進のため、比較したデータをもとに解決策を提案した。

④結果

静岡県内各地のお茶の種類や特徴、そのお茶にあった美味しいお茶の入れ方、相性が良いお土産・茶菓子、歴史、お茶に関するイベント、鹿児島県のお茶の特徴との比較等について理解を深めることができた。静岡県の美味しいお茶はとても誇らしいものだが、全国的に急須で楽しむお茶のシェアは、缶やペットボトルへと移ってしまっていることが分かり、お菓子などの「飲む」以外のお茶の活用方法についても活性化を促す必要があると感じた。



⑤今後の展望

サークル内でお茶についての調査結果をそれぞれ発表しあい、お茶についての理解がより深まった。本来企画していたイベントがコロナによって急遽変更することになったため、準備不足が目立つ面があった。

これらの改善点も踏まえ、今後は今回調査したデータをもとにイベントを開催したり、発表会などに役立てていきたい。

Utopia～SDGs 達成のために私たちができることって？～

所属 : Utopia

外国語学部 英米語学科（代表）湯原 隼太

1. 目的・概要

本活動では、現在、2030 年までに解決が目標とされている Sustainable Development Goals(以下 SDGs)が注目されている中、日本での SDGs の認知度はあまり高くないと感じる。今後の世界を担う我々若い世代から解決のために SDGs の“2 番の飢餓をゼロに”“5 番ジェンダー平等を実現しよう”“10 番 人や国の不平等をなくそう”に焦点を当て、絵本の作成、大学祭でのイベントを通した広報、SNS 媒体を通した情報発信を行い、多くの人に SDGs がどのような内容なのか、また個人が何をすればいいのか考えるきっかけにしてもらうことを目的としている。



図 1 Utopia メンバー

2. 事業内容・方法

本事業では、以下の 3 つの事業を主に実施した。

① 大学祭で SDGs を知ってもらうための企画・イベント

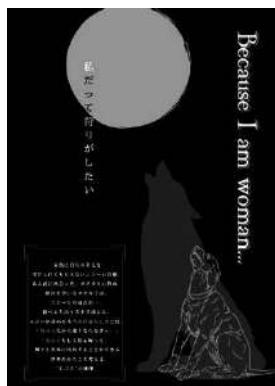
11 月に本学で開催された大学祭で、Utopia の活動の広報、SDGs17 個の目標の紹介、また 17 の目標のうち、3 つのテーマに焦点を当てクイズ形式で資料を展示した。大学祭で私たちのブースに来ていただいたお客様の協力を基にジェンダー平等に関連した、LGBTQ フラッグを作成した。

② 絵本の作成

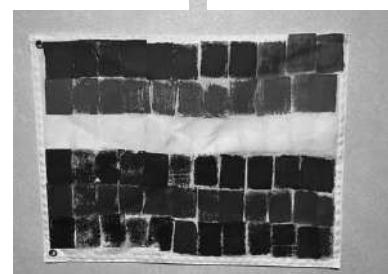
私たちが作成した絵本は、SDGs の 5 番 “ジェンダー平等を実現しよう” をテーマにした。テーマの選択理由は、大きく分けて 2 つある。1 つ目は、世界経済フォーラムが 2021 年 3 月、「The Global Gender Gap Report2021」で各国における男女格差を図るジェンダーギャップ指数(以下 GGI)を発表し、



2 ポスター1



3 ポスター2



4 LGBTQ フラッグ

日本の総合スコアが 0.656 で 156 カ国中 120 位であり、先進国の中で最低レベルであり、アジアの国の中でも低い結果となったからである。2つ目に、多様性 (diversity) という言葉が近頃よく耳にするが、今後の世界を担う若い世代に多様性の重要性や、周りの人と共存する重要性を訴えかけることを目的とした。以上の 2 点がテーマの選択理由であり、難しいテーマを絵本にすることで、親子で楽しむ、または読んだ人の理解を容易にするための第一歩として絵本という媒体を使うことにした。

③ 他大学開催のイベントに参加

本大学に併設されている地域貢献センターからご紹介いただき、日本大学国際関係学部様が主催された SDGs のジェンダーを様々な視点で研究された日本大学の講師・教授の皆様のオンライン講義を通して参加した。イベントに参加し、感じたことが 2 点ある。1つ目は、GGI の結果を多くの人が理解した上で、解決策を若い世代から考える必要がある。我々 Z 世代は、X・Y 世代に比べてジェンダーレス・ジェンダー平等という言葉に慣れ親しんでいるが、多くの問題が起きているのは社会に出てから感じるものである。学生のうちにジェンダー平等を知識として持っていることは当たり前のことだが、知識を応用して、風潮や時代を変化させるのが重要である。そのため、若い年代から、今の時代に起こっているジェンダーの問題を生徒・学生がどのように解決できるかを学校の中で学ぶ必要がある。2つ目は、専門的で詳細な情報を知る必要性を感じた。日本の女性の就業率は徐々に上昇しているが、男性と比べると平等であるとは言い難い。またコロナウイルスの影響で（朝日新聞 2021 年 3 月の記事）DV 被害が 8 万 2643 件と 17 連続で最多を更新した。DV から逃れられない理由は様々だが、経済力は一つの大きな要因であるという。女性は物理的に男性に比べて力がおとることから、経済的格差の縮小を進めるために、日本の法を改定する必要があるという。我々の活動は、世の中の問題や SDGs の知識について広めることを中心に行ってきたが、実際には我々が見えない世界で解決困難なことが起こっている。そのため、今回のように専門的に研究されている日本大学講師・教授の方々のお話を伺えたことは非常に貴重な機会であり、改めて考える機会となった。

〈地域の活動〉

2021 年 11 月 20 日（土）～12 月 16 日に男女共同参画センター「あざれあ交流会議」が主催した、「おしえて！LGBT パネル展」という静岡県内の公共図書館の 11 館を巡回するパネル展の御前崎市立図書館に参加した。このイベントは LGBT を始める性の多様性について理解を深めることができる展示会であり、会場には LGBT について分かりやすく解説したパネルや、入門書・絵本や小説、当事者団体や行政が作ったリーフレットなどが展示されていた。



3. 事業成果

本学祭の展示会に来た多くの方々と SDGs について意見を交換することができた。特に、中学生、小学生と話した際に、学校で SDGs のことを調べた、SDGs の内容がテストに出題されたという話を伺い、SDGs の話題が我々がこのプロジェクトを始めた時の感想とは異なり、小中学校でも多く取り扱われてきていることがわかった。一方で、大人の方々は会社の中で SDGs 解決に向けた政策を行っているが、浸透率はあまり高くないように思えるといった意見から、大学生以上の社会人に企業が必要とする情報だけでなく、個人が身近に感じることができる情報を発信していく必要が考えられる。手段は今回の事業で行われたような、SNS だけでなく、紙媒体を使うことで多くの世代に情報を発信できると考える。また、絵本を作成したが、多くの方に見てもらう機会を今年度は多く作れなかった。その理由としてコロナウイルスが大きな要因を占めている。そこで絵本をオンライン上で公開し、今後より多くの人に読んでもらい、評価をしてもらえるようなシステム作り、広報を行う予定である。

4. 今後の展開

本事業で作成した絵本を本学の施設に配置してもらい、今後、本学に関わる学生や先生に読んでもらうことによりジェンダーに対して理解を深めてもらえるようになることを願う。また、本事業で関わった学生を中心に Instagram をはじめ、SNS 媒体を通じて、多くの人に SDGs を知ってもらえるような情報を発信し続け、少しでも身近に感じてもらえるような活動を継続的に進めていきたい。SDGs は世界が取り組んでいる問題であり、多くの年代がそれぞれの場所で関わることである。我々大学生は社会人に最も身近な存在であることから、社会の一員として自覚を持ち、周囲の環境をどのように良い方向に改善することができるのかを考える必要がある。そのためには、学内活動だけに止まらず、学外の活動に注目できるよう視野を広げる必要がある、またそのようなアカデミックな活動を促す学校の方針にも期待したい。また、本学には今回のところは未来塾の活動をサポートしてくださった地域貢献センターがあることから、もっと多くの学生に活用してもらえるよう願っている。

〈参考文献〉

朝日新聞 2021 年 3 月 4 日

Global Gender Gap Report 2021 INSIGHT REPORT MARCH 2021

内閣府 男女共同参画局 HP

永田（日本大学短期大学部ビジネス教養学科）, 「観光業にみる感情労働とジェンダー」 12 月 10 日

西乃宮（日本大学国際関係学部）, 「社会と家族のジェンダー」, 12 月 10 日



初めに・目的

本活動では、2030年までに解決が目標とされている Sustainable Development Goals(以下 SDGs)が注目されている中、日本でのSDGsの認知度はあまり高くないと感じた。そこで、今後の世界を担う我々若い世代から解決のために SDGsについて大学祭での展示会を通した広報、SNS媒体を通して情報発信、ジェンダーをテーマとした絵本作成を通して、多くの人にSDGsがどのような内容なのか、また個人が何をすればいいのか考えるきっかけにしてもらうことを目的としている。

取り組んだ内容

本事業では、以下の3つの事業を主に実施した。

1.大学祭でSDGsを知ってもらうための企画・イベント

(SDGsの内容紹介・Utopiaの活動・ポスター作成)

2.絵本の作成

(ジェンダーの問題)

3.他大学開催のイベントに参加

(日本大学様が主催したイベントにオンライン参加をして専門的な視点からのジェンダー問題について学ぶ)



今後の展望・メンバーの感想

結果・考察



本学祭の展示会に来ていた多くの方々とSDGsについて意見を交換することができた。

- 中学生、小学生は、学校でSDGsのことを調べた、SDGsの内容がテストに出題された。
- 大人の方々は会社の中でSDGs解決に向けた政策を行っているが、浸透率はあまり高くないよう思える。Etc.

大学生以上の社会人に企業が必要とする情報だけでなく、個人が身近に感じることができる情報を発信していく必要が考えられる。手段は今回の事業で行われたような、SNSだけでなく、紙媒体を使うことで多くの世代に情報を発信できると考える。また、絵本を作成したが、多くの方に見てもらう機会を今年度は多く作れなかった。その理由としてコロナウイルスが大きな要因を占めている。そこで絵本をオンライン上で公開し、今後より多くの人に読んでもらい、評価をもらえるようなシステム作り、広報を行う予定である。

- 若い世代が社会の一員ということを自覚し、解決に向けアカデミックな活動に参加していく。
- 個人が容易に情報を吸収、発信できる時代だからこそ、解決のために主体的な行動を行うべきだ。
(感想)
- 世界、日本の危機を多少なりとも理解することができた。私達なりにできることを行い、良い世界となるよう努めていきたい。



保育実習におけるリアリティショックをなくす高大連携プロジェクト ～保育コースのキャリア教育を考える～

所属：保育学部 山本睦ゼミ

3年 平野莉緒（代表）、林弘太（会計）、渡邊直輝、2年 大石彩加、河合ゆめみ

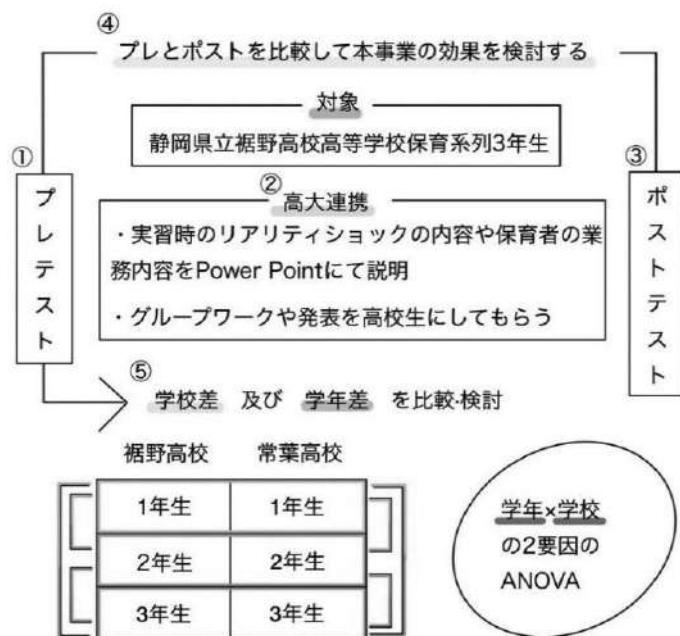
1. 目的・概要

平成29年の保育職の離職率は10.3%と高く、保育者不足の問題は今もなお解消されたとはいえない。主な保育職の離職理由の一つとして、「リアリティショック」が挙げられる。「リアリティショック」とは、“自分がイメージしている保育者像”と“実際の保育者像”的ギャップから起こるものである。本事業は、保育者を目指す高校生の保育職に対するリアリティショックを回避する支援を行うことを目的とする。

2. 事業内容・方法

- ① 9月に裾野高校、常葉高校の生徒たちに「就職準備性」の尺度を用いた質問紙調査を実施する。
- ② 10月20日(水)裾野高校にて事業として“実習時のリアリティショック”や“保育者の業務内容”の説明“グループワーク”や“発表”を行う。
- ③ ②が終わり、残りの時間で①と同じ質問紙調査を実施する。
- ④ ③回収後①と③の質問紙を比較・分析をし、本事業が高校生の「職業理解」や、「大学へ進学する意欲」に繋がったのかを検討する。
- ⑤ 裾野高校保育系列1年生から3年生及び常葉高校保育系列1年生から3年生の学年差を検討すると共に、それぞれの学校差を検討する。

今回の高大連携グループワークは、常葉高校でも実施予定だった。しかし、常葉高校との日程を合わせることが出来ず、裾野高校でのみグループワークを実施したため、分析モデルの修正が必要となった。



3. 事業成果

1. 高大連携事業

〈高大連携時の流れ〉

10 : 50～11 : 20	・大学生がグループワークに先行して実習時のリアリティショックの内容や、保育職の業務内容などについて高校生に話をする。
11 : 20～11 : 40	・グループワーク（各班に分かれ、発表に向けて話し合い）
11 : 40～11 : 50	休み時間 高校生に発表者を決めておいてもらう。
11 : 50～12 : 40	・グループワーク続き、発表 + 事後の質問紙調査

【発表に使用したスライド】



「幼稚園教諭免許状の 1 種と 2 種の違い」、「最終学歴に応じた初任給の違い」、「ゼミで学んだ理論を基に子どもたちとの関わり」について考えた。また、4~5 人のグループをつくり、以下の 3 つのテーマのうちどれか 1 つについて約 20 分話し合い、その後発表をする。

①子どもたちが自分の楽しいこと、好きなことを見つけることができるようにするためにはどうしたら良いだろうか

②実習で高い評価をもらうためには何が大事か

③実習の日付を決定する際、スムーズに実習先へ電話をするために何を意識すればいいか

2. 分析結果

質問紙調査は、裾野高校の学生(1年生 24 名、2 年生 20 名、3 年生 20 名)と、常葉高校の学生(1 年生 30 名、2 年生 38 名、3 年生 45 名)を対象に行った。尺度は、「自律的進学動機尺度(大久保・川田・江村・折田, 2010)」、「キャリア成熟尺度(中込・塩川・斎藤・角山, 2009)」、「職業的アイデンティティ尺度(児玉, 2016)」を使用した。高大連携グループワーク後には、グループワークに参加した裾野高校の 2 年生 19 名を対象に質問紙調査を行った。また、詳細な知見を得るために、そのうち 6 名に 1 対 1 で約 10 分間、「理想の保育者像」やそれに近づくために「今現在していること」などについての半構造化インタビュー調査を実施した。

(1) 「選択した職業への就職意欲」と関係

裾野、常葉高校の 1 年~3 年生の計 177 名に質問紙調査を実施。「選択した職業への就職意欲」を従属変数に、「将来への関心」の High 群・Low 群と「外的調整」の High 群・Low 群を独立変数として対応のない t 検定を行った。その結果どちらにも有意な差は見られなかった。

Table4-1 選択した職業への就職意欲と各因子との検定結果							
因子・尺度名	水準	平均値	標準偏差	効果量d	t 値	df	p 値
選択した職業への就職意欲	将来への関心	19.972	5.838	0.134	0.556	64.188	0.58
選択した職業への就職意欲	外的調整	20	0.904	0.132	0.625	75.739	0.534
		19.194	5.612				
		19.188	0.936				

*. p < .05, **.p < .01, ***.p < .001

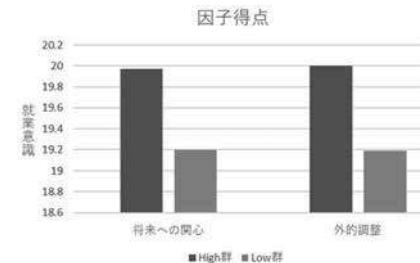


Figure4-1 将来への関心・外的調整

(2) グループワーク前後の変化

裾野高校 3 年生、18 名を対象に「就職準備性」の尺度を用いた質問紙調査を実施。「選択した職業への就職意欲」についてグループワークの実施前後で差があるのかを検討した。因子「選択した職業への就職意欲」を従属変数に、グループワーク実施前後を独立変数にして対応のある t 検定を行った。その結果は有意な差は得られなかった。

Table4-2 選択した職業への就職意欲とグループワーク前後の検定結果							
因子・尺度名	水準	平均値	標準偏差	効果量d	t 値	df	p 値
選択した職業への就職意欲	プレ	6	1.768	0.273	0.753	16	0.462
	ポスト	5.529	1.7				

*. p < .05, **.p < .01, ***.p < .001

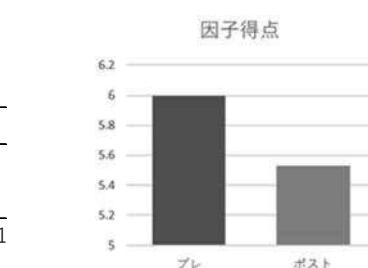


Figure4-2 選択した職業への就職意欲とグループワーク前後の検定結果

(3) 「理解度」と「具体性」の関連性

質問紙の自由記述項目に関して保育職についての「理解度」と保育職の業務内容への「具体性」との関連性についてと、グループワーク前後での変化を検討するため、「理解度」の High 群・Low 群と「具体性」の High 群・Low 群で χ^2 検定を行った。その結果「グループワーク前」では関連は見られなかつたが、「グループワーク後」では関連が見られた。

Table4-3 保育職に関する「理解度」と保育職の業務内容への「具体性」						
	理解度のHigh		理解度のLow		χ^2	p
	実測値	残差値	実測値	残差値		
プレ	具体性のHigh	3	0		1.19	0.147
	具体性のLow	26	26			
ポスト	具体性のHigh	8	▲	0	▽	4.53
	具体性のLow	13	▽	13	▲	0.365

*.p<.05, **.p<.01, ***.p<.001

(4) 学年差、学校差の検討

使用した尺度の因子について“学校差”及び“学年差”を検討するため、裾野、常葉高校の1年生～3年生の計177名を対象に対応のないt検定を行った。その結果どの項目においても有意な差は見られなかった。

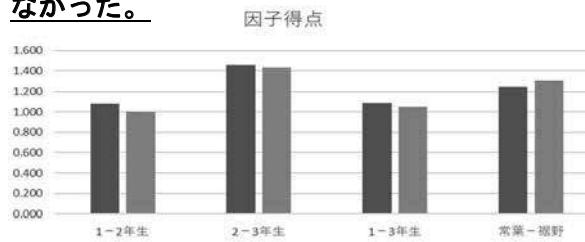


Figure4-3 学年差・学校差

(5) 「将来への展望」と「今やるべきことの理解」の関連性

追加調査として11月中旬に裾野高校のグループワーク参加者6名に半構造化インタビュー調査を行った（6名に関しては学校側に選考をしていただいた）。1対1で約10分間、「理想の保育者像」やそれに近づくために「今現在していること」などをインテビューした。この項目に関して、「将来への展望」と「今やるべきことの理解」との関連性を検討するため、それぞれHigh群・Low群間で χ^2 検定を行った。その結果関連は見られなかつた。

Table4-4 学年差、学校差の検定結果							
因子・尺度名	水準	平均値	標準偏差	効果量d	t 値	df	p値
選択した職業 への就職意欲	High	1.083	0.282	0.377	1.212	39	.233
	Low	1.000	0.000				
因子・尺度名 への就職意欲	水準	平均値	標準偏差	0.050	0.167	41	.868
	High	1.455	0.510				
選択した職業 への就職意欲	Low	1.429	0.507				
	水準	平均値	標準偏差				
選択した職業 への就職意欲	High	1.087	0.288	0.139	0.465	41	.645
	Low	1.050	0.224				
因子・尺度名 への就職意欲	水準	平均値	標準偏差	-0.124	-0.446	48	.658
	High	1.250	0.442				
常葉・裾野	Low	1.308	0.471				

Table4-5 「将来への展望」と「今やるべきことの理解」の検定結果							
因子・尺度名	水準	平均値	標準偏差	効果量d	t 値	df	p値
将来への展望 への就職意欲	High	9	23	0.058	0.033	n.s	
	Low	6	16				
今やるべきこと への就職意欲	High	1.250	0.442	-0.124	-0.446	48	.658
	Low	1.308	0.471				

*.p<.05, **.p<.01, ***.p<.001

4. 今後の展望

以上の質問紙調査、インタビュー調査からわかったことは以下の通りである。

- 「将来への関心」や「外的調整」の大小によって、「選択した職業への就職意欲」の得点に差は生まれない。
- グループワーク実施による「選択した職業への就職意欲」の得点に差は生まれない。
- グループワークを通して保育職への「理解度」と保育職の業務内容への「具体性」を関連づけることができた。
- 各学校や各学年で「選択した職業への就職意欲」の得点に差は生まれない。
- 「将来への展望」と「今やるべきこと」の関連は見られなかつた。

以上の結果から、今回の高大連携グループワークを通して、目指すべき保育者像は明確になった。しかしながら、インタビュー調査を通して、今の自分が理想の自分に近づくために何をすべきなのかという部分については具体的になつてないということが分かつた。

今後の課題としては「今の自分」と「理想の自分」とを上手く接続することが挙げられる。

「将来への展望」と「今やるべきことの理解」の関連が見られなかつたことについて、見通しが持てないというメタ認知能力の低さにより、「将来の展望」があつても「今やるべきことの理解」が出来ていない生徒の存在が予測される。これを埋めるには、職業理解だけでなく、「高校生の間に開発すべき資質」について考えていく必要がある。

目的・概要

本研究では、主な保育職の離職理由の一つとして自分がイメージしている保育職像と実際の保育職像のギャップから起こるリアリティショックに焦点を当て、保育コース所属の高校生とのグループワークを通してリアリティショックを回避する支援を行うことを目的としている。

事業内容・方法

① 9月に裾野高校、常葉高校の生徒たちに就職準備性の尺度を用いた質問紙調査を実施

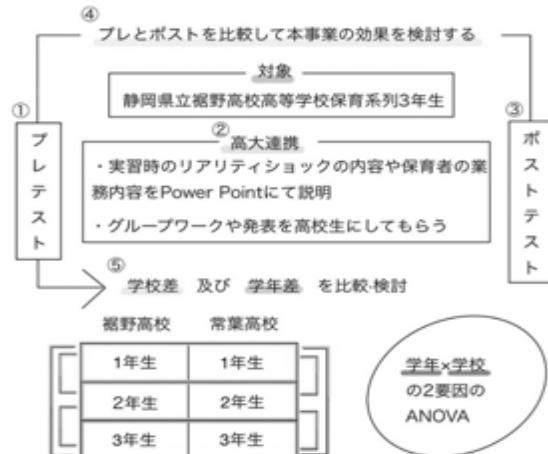
- ・自律的進学動機尺度（大久保・川田・江村・折田,2010）
 - ・キャリア成熟度尺度（中村・塩川・斎藤・角山,2009）
 - ・職業的アイデンティティ尺度（児玉,2016）
- 3つを用い、高校生を対象に5段階評定で回答をしていただいた。

② 10月20日(水)、静岡県立裾野高等学校にて、裾野高校保育系列3年生を対象に高大連携グループワークを3時間目、4時間目に実施

1. 子どもたちが自分の楽しいこと、好きなことを見つけることができるようにするためにはどうしたら良いだろうか
 2. 実習で高い評価をもらうためには何が大事か
 3. 実習の日付を決定する際、スムーズに実習先へ電話をするために何を意識すればよいか
- これらの3つのテーマの中から1つ選択し、4~5人のグループワークを20分間行い、その後発表を行った。

③最後に、①の質問紙を再度回答していただいた。

(常葉高校は日程が合わず実施不可)



④ 高大連携の前後で質問紙を比較、分析をし、本事業がどれだけ高校生の職業理解や、大学へ進学する意欲に繋がったのかを検討する。

⑤ 裾野高校保育系列1年生から3年生及び常葉高校保育系列1年生から3年生の学年差を検討すると共に、2校の学年差を検討する。

結果・考察

今回の調査から、わかったことは次の5点である。

- ①将来への関心や外的調整の大小によって、選択した職業へ就職意欲の得点に差は生まれない。
- ②グループワーク実施による選択した職業への就業意欲の得点に差は生まれない。
- ③グループワークを通して保育職への理解度と保育職の業務内容への具体性を関連づけることができた。
- ④各学校や各学年で選択した職業への就業意欲の得点に差は生まれない。
- ⑤将来への展望と今やるべきことの関連は見られない。

自指すべき保育者像は明確になったが、今の自分が理想の自分に近づくために、何をすべきなのかという部分について具体的になっていないことが調査を通してわかった。

追加調査

グループワークに参加した裾野高校の2年生19名のうち6名に1対1で約10分間、「理想の保育者像」や、それに近づくために「今現在していること」などについての半構造化インタビュー調査を実施した。

今後の展望

今後の課題としては「今の自分」と「理想の自分」とを上手く接続することが挙げられる。「将来への展望」と「今やるべきことの理解」の関連が見られなかったことについて、見通しが持てないという“メタ認知能力の低さ”により、「将来への展望」があっても「今やるべきことの理解」が出来ていない生徒の存在が予測される。これを埋めるには、職業理解だけでなく、「高校生の間に開発すべき資質」について考えていく必要がある。

目指せ、天然記念物!! ～弁財天川の日本のハイビスカス～

社会環境学部浅見ゼミ 4 年

榎本優吾、白松知紀、一木利行、鬼澤陽人、竹村悠太



日本のハイビスカス

1. 目的・概要

ハマボウはアオイ科の植物で夏季にハイビスカスのような黄色い花を咲かせることから「日本のハイビスカス」と呼ばれ、干潟に生育する低木である。しかし、干潟の激減に伴い、ハマボウも減少の一途を辿っている。

そんな中私たちは、弁財天川の河口で広大な干潟を伴うハマボウを見つけた。さらに岸辺にはヨシ原が広がり、中には断片的ながらも干潟に特有の植生である塩生湿地群落を確認できた。そこで私達は弁財天川のハマボウを含む塩生湿地群落の保全に向け、掛川市の天然記念物指定を目指した。

2. 事業方法

- ①県内のハマボウの分布と生育状況：既往文献から静岡県内の分布地の記載を調べ、その結果をもとに現地に行き個体の有無と、個体数を計測した。
- ②弁財天川の現存植生：ドローンで空中写真を撮影し大まかに群落を分けた後、現地にて干潟および塩生湿地群落の広がりを確認した。
- ③塩生湿地群落の生育立地と潮位との関係：水位計を設置し弁財天川の潮位の変化のデータを得た。現存植生にて明らかになった塩生湿地群落およびハマボウの個体が分布する立地の地盤の標高を測量した。
- ④ハマボウの生態的特性：ハマボウの種子および実生を現地にて採取し室内にて条件を決めて実験を行った。
- ⑤プロモーションビデオの作成：弁財天川の魅力になる動植物・景色をドローンによる空中撮影を行った。

3. 事業成果

①静岡県下のハマボウの分布状況

既往文献によるとハマボウは 1984 年までは静岡県の沿岸部全域に分布していたが、1967 年の時点にはすでに絶滅が始まっていた。

現地踏査から既往文献に記載されていた分布地ではさらに絶滅が進行していることが分かった。2021 年現在、新たに確認した分布地もあったが自生のみの分布地は 9ヶ所であった。弁財天川はそのうちの 1 つで、県下 6 位の個体数を誇った。

②弁財天川の現存植生

弁財天川の河口には、干潟が広がり、岸辺にはヨシ群落が広がる。さらにハマボウ群落、アイアシ群落、シオクグ群落、ナガミノオニシバ群落、コウキヤガラ群落といった多

様な塩生湿地群落が成立していた。

ハマボウ群落が最も集中していたのは今沢橋から昭和水門の間であった。

県内の他の河川ではハマボウ群落を伴う干潟とヨシ原は4水系しか見られず、県下でも希少な河川であることが分かった。

③塩生湿地群落の生育立地と潮位との関係

弁財天川の潮位は、舞阪の検潮所の潮位と同じく6月から9月へと次第に高くなることが明らかになった。さらに河川を整備する際の基準となる水位(朔望平均満潮位)を推定することができた。この基準となる水位と塩生湿地群落、ハマボウ単木の地盤の標高との関係を示すことができた。すなわち、ハマボウの個体は、6~9月の大潮の満潮時の台風による高潮や大雨の時に冠水するが、小潮の満潮時では冠水しないに生育していることが明らかになった。

④ハマボウの生態的特性

種子は10月に散布され越冬し、翌年の潮位が高くなる6~9月の大潮の満潮時かつ台風による高潮や大雨の時に、ほとんど冠水しない場所に打ち上げられ日照条件に関わらず気温が20°C以上になると発芽することが明らかになった。

⑤プロモーションビデオの作成

弁財天川の干潟はアナジャコ取りや釣りに利用されている。静岡県下でも人に活用される干潟は大変珍しく、これの弁財天川の魅力を伝えるためにビデオを作成した。

4.まとめ

静岡県下でハマボウの分布地が減少している中で弁財天川は県内6位の個体数を誇り、干潟とヨシ原だけではなくハマボウ群落を含む干潟に特有の植生が成立する数少ない河川である。この弁財天川の魅力は地域の誇りになると想え、掛川市指定の天然記念物とする提案を行う。

ただし河川内で天然記念物に指定するためには、河川管理者の同意が必要である。河川管理者は、河川内で天然記念物が指定されると、現状変更に規制がかかることから天然記念物の指定に賛同が得られるとは限らない。しかし静岡県ではすでに市指定の天然記念物に指定されている前例がある。なにより本事業では、河川を整備する際の基準となる水位とハマボウの単木および塩生湿地群落の地盤高の関係を示すことができた。これにより、河川管理者が万が一掘削工事を行っても、ハマボウ単木や塩生湿地群落の生育基盤の再生ができるようになるため、河川での天然記念物指定に賛同してもらえると考える。

5.今後の展望

弁財天川を掛川市の天然記念物に指定するために、河川管理者と文化財担当部局である掛川市の教育委員会に赴き、天然記念物に指定してもらうための提案を行う。さらに今回は添付する申請書(案)の作成まで行った。さらに弁財天川の魅力を地域住民に知ってもらうため、作成したPVを掛川市のホームページへの掲載を目指す。

(案)

掛川市協働環境部 文化・スポーツ振興課 様

掛川市市指定文化財指定申請書

1. 名称 弁財天川のハマボウを含む塩生湿地群落および干潟
2. 種別 天然記念物
3. 概要 範囲：掛川市の弁財天川における河口から 1.8km の昭和水門まで
対象：範囲内に生育するハマボウを含む塩生湿地群落および干潟
4. 管理者 袋井土木事務所
5. 指定を申請する理由

ハマボウはアオイ科の落葉低木で、夏季にはハイビスカスのような黄色い花を咲かせます。ハマボウは現在、全国的に減少傾向にあり、すでに千葉県、大阪府、岡山県、広島県で絶滅が報告されています。静岡県下のハマボウの分布地も 1967 年の時点で既に絶滅が始まっています。自生地は現在も減少傾向にあります。ハマボウが減少している理由は、生育地である干潟が減少しているからです。干潟は日本全国で減少しており、1945 年には干潟の面積は 82,621ha でしたが、1996 年には干潟の面積は 49,380ha にまで減少しています。また干潟の減少に伴い、干潟を生育場所とする塩生湿地群落も減少しています。

こうした状況の中で、掛川市の弁財天川には 237 個体のハマボウが生育しており、干潟も広がっています。干潟にはヨシ群落が広がっており、ハマボウ群落をはじめとした塩生湿地群落が成立しています。塩生湿地群落は河口域が最も多様であり、ハマボウ群落は河口から昭和水門までの区域で見られました。ハマボウ群落とヨシ群落、干潟が同時に見られる水系は静岡県 57 水系の中でもわずか 4 水系のみです。さらに河口域の干潟にはアナジャコや環境省レッドデータリストの準絶滅危惧に分類されているトビハゼといった干潟特有の生物も生息しています。干潟は動植物以外にもアナジャコ取りや釣りなど人にも利用されています。このような場所は静岡県下には類を見ず、弁財天川だけの魅力となっています。

このように、弁財天川のハマボウを含む塩生湿地群落および干潟は県内でも価値のある場所であるため、地域の文化財として天然記念物にする価値は十分にあると考えられます。なお弁財天川を天然記念物に指定すると法的拘束力をもつため干潟の利用に規制がかかってしまいますが、弁財天川の魅力は河口域の干潟を地域住民問わず、人が利用していることです。天然記念物によって河口域の干潟の利用に制限がかかることはないように、お願い申し上げます。

6. その他参考となる事項

指定後に河川改修が発生し対象となるハマボウの単木や塩性湿群落、干潟が失われる際には、対象となる群落の生育基盤や干潟を再生します。

アオハル！！車いす冒険地図 in Shizuoka

Wheel Chair Adventure Map

保育学部 赤塚ゼミ 3年

1. はじめに

本プロジェクトのきっかけは、車椅子の高校生から、「ヘルパーの同行なしに、友人同士で10代らしい外出をしてみたい」という要望を聞いたことがある。実際に、車椅子での外出は、施設等のハード面だけでなく、現地のスタッフ対応等のソフト面の双方において課題が多い。

静岡市では「ゆびふら」というバリアフリーマップをWEBにて公開しており、個々の施設や交通機関について車椅子ユーザー向けの情報を発信している。しかし、高校生から大学生くらいの若者を対象に、友人や家族と楽しむための具体的な情報が記載されたタウンガイドのようなマップは、県内ではほとんど見当たらない。そこで、本企画では、10代の車椅子ユーザーの能動的で豊かな社会生活を促進するために若者の外出に関する現状と課題を明らかにし、静岡市内で活用できる車椅子ユーザー向けの冒険マップを作成することを目的とした。

2. 車椅子を利用していない若者の外出に関する調査（検討Ⅰ）

1) 目的

車椅子ユーザーでない若者を対象に外出に関する質問紙調査を実施し、その実態を明らかにすることを目的とした。

2) 方法

- ① 対象：車椅子を使用しない高校生210名および大学生150名の計360名を対象とした。
- ② 手続き：「外出に関するアンケート」をMicrosoft Formsを用いて実施した。質問項目は、よく出かける外出先や同行者、外出時に重視する点など、計30問から構成された。
- ③ 調査期間：令和3年7月17日から7月29日までとした。

3) 結果と考察

回答は232名から得られ、回収率は64%であった。回答者の性別は男性が42%、女性が57%であった。年齢は10代後半が56%、20代前半が43%、その他が1%であった。

よく行く外出先は、衣料品店が最も多く14%であった。次いで、ファストフード店と百貨店が11%であった。同行する相手は、友人が最も多かった。

家族で行きたい場所としては、遊園地が15%で、水族館とカラオケが7%であった。友達と行きたい場所は、水族館が最も多く14%であった。次いで、遊園地が12%、イルミネーション鑑賞と祭り、映画館が8%であった。恋人と行ってみたい場所は、百貨店とファミリーレストランが最も多く9%であった。次いで自然のある場所（山や海等）と遊園地が8%であった。

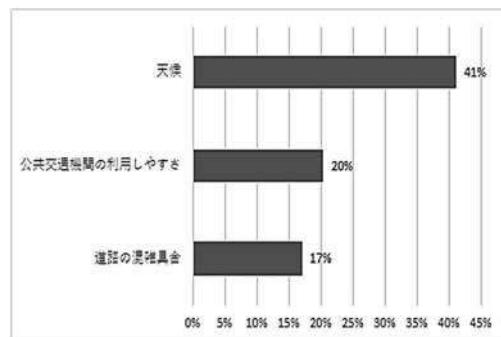


図1 外出時に重視している点

一方、外出時に重視している点としては天候が 41%と最も多く、次いで、公共交通機関の利用のしやすさが 20%、道路の混雑状況が 17%であった（図 2-2）。対象者は、普段、自転車や公共交通機関で移動していることが予想されるため、天候の良し悪しは外出意欲に影響を与えると考えられる。この点は、車椅子ユーザーでも同様であると予想されるため、静岡市内の車椅子冒険マップの作成において考慮する必要がある。

3. 車椅子利用者に向けた外出に関する調査（検討 II）

1) 目的

車椅子利用者を対象にインタビュー調査を行い、外出に関する意識や困り感を整理することを目的とした。

2) 方法

- ① 対象：車椅子ユーザー計 4 名を対象とした。内訳は、10 代後半が 3 名、20 代前半が 1 名であった。
- ② 手続き：対面または Zoom による聞き取り調査を実施した。聴取した内容は、検討 I で行なった質問に加え、車椅子での外出に関連した困り感や留意点とした。
- ③ 調査期間：令和 3 年 8 月 15 日から 9 月 6 日までの間で、計 3 日間とした。

3) 結果と考察

表 1 は、対象者のよく行く外出先の上位 3 位を示したものである。対象者に共通する外出先としては、ショッピングモール、書店、ゲームセンター、ホビーショップが挙げられた。

家族と行ってみたい場所については、対象者間に共通点は認められなかつたが、遠出をしたり、自然を満喫できる場所などが挙げられた。友達と行ってみたい場所のうち、対象者間で共通した回答は、映画館とゲームセンターであった。恋人と行ってみたい場所は、対象者間に共通点は認められず、商業施設や室外で体を動かせる場所など、様々であった。

対象者が外出時に重視していることとしては、屋根のある道や平坦な道、あるいはトイレやエレベーターまでの距離などの経路に関するここと、財布やタブレット等の持ち物に関するここと、お金を使いすぎない等行動面に関するこことであった。対象者の共通点として、友人との外出はほとんどなく、家族との外出が多かった。

検討 I と比較して、車椅子ユーザーの外出では、天候や公共交通機関の利便性の他に、段差の有無や道幅、トイレやエレベーターまでのアクセスなど多面的な情報が必要であることが明らかとなった。

表 1 対象者のよく行く外出先

	対象者 A	対象者 B	対象者 C	対象者 D
1	書店	ショッピングモール	ハンバーガー店	ショッピングモール
2	ホビーショップ (アニメ)	ゲームセンター	総合スーパー	書店
3	リサイクルショップ (CD・アニメ)	ホビーショップ (アニメ)	回答なし	ゲームセンター

「アオハル！！車椅子冒険地図 in Shizuoka」の作成（検討Ⅲ）

1) 目的

検討Ⅰ及びⅡに基づき、車椅子ユーザー向けのタウンガイドマップの作成を目的とした。

2) 方法

検討Ⅰ及びⅡに基づき、車椅子の有無に関係なく楽しめる外出プランを大学生の視点で作成し、静岡市内で協力の得られた施設および店舗計13カ所に調査を行なった。調査は、令和3年11月2日から11月25日までとし、筆者らが車椅子に乗って協力施設を訪問し、安全性や利便性等を確認した。外出記録は、協力施設の許可を得て動画で行った。

得られた情報をA4サイズ2枚分のマップとしてまとめ、マップに掲載したQRコードから動画で現地の様子を確認できるよう工夫した。

3) 結果と考察

外出プランは、カップルプラン、友達プラン（2種）、家族プランの計4つを作成し、冒険マップとしてまとめることができた。作成したマップと動画は、検討Ⅱの対象者および本検討の協力施設に確認を依頼し、指摘事項については修正を行った。図2の画像は、友達プラン①の動画の画像である。協力施設からは励ましと賞賛を頂くなど好意的な反応であったが、静岡市内には本企画への協力が得られなかつた施設も複数あり、車椅子での外出の難しさを感じた。さらに、筆者らが実際に車椅子に乗車することで、車椅子ユーザーが日頃感じている困難や恐怖を体感し、地域におけるバリアの多さを再確認できた。そのため、本マップを周知させることで、車椅子に乗ったままでも楽しく外出できる場所があることを知つもらつたり、車椅子ユーザーの外出に協力できる人や施設が増えていくよう地域に働きかけることが重要であると考える。



図2 友達プラン①

4. おわりに

マップ作成後、車椅子ユーザーの協力者と家族から、「このマップなら行ってみたい、行けるかもと思えるマップになっている」との意見が寄せられた。具体的には、マップに動画が紐づいていることによって、レストランのテーブルの高さや脚の位置が車椅子に当たらないかなどを見て確認できることで、安心感が増したようであった。このマップを通じて車椅子ユーザーが地域の施設や店舗への関心を高め、家族だけでなく友人との外出における選択肢が増えるならば、彼らの余暇はより充実するものと考える。

一方、協力を得られた地域の施設や店舗からは、これまで車椅子で来訪された方のエピソードを教えていただいたり、車椅子で訪問した筆者らとのやり取りの中で様々な工夫や配慮の提案をいただいた。この活動を通じて、車椅子ユーザーに対して再認識していただき、合理的配慮の提供が当たり前になるような社会への啓発になればと考える。

本企画を通じて、我々学生自身も、車椅子での外出困難について身をもって体験できた。将来、保育者になった時、困っている子どもの視点で考えるための知識を得ることができた。

本マップには、意見や感想を投稿できるQRコードを掲載した。今後、より多くの意見を収集し、使いやすさについて検討していくことが課題である。

アオハル！！車いす冒険地図 in Shizuoka

～Wheel Chair Adventure Map～

常葉大学 保育学部 赤塚ゼミ3年

1. プロジェクトの目的

ある車椅子ユーザーから、「ヘルパーの同行なしに、友人同士で10代らしい外出をしてみたい」という要望を聞いたことがある。実際に、車椅子での外出は、施設等のハード面だけでなく、現地のスタッフ対応等のソフト面という双方の問題がある。

静岡市では「ゆびぶら」というバリアフリーMAPをWEBにて公開しているが、個々の施設や交通機関の情報に留まり、若者が地域で目的別に楽しむために整理されたマップは見当たらない。本企画は、10代の車椅子ユーザーの能動的で豊かな活動および生活を促進するために、若者の外出に関する現状と課題を明らかにした上で、静岡市内で活用できる車椅子ユーザーのための冒険マップを作成することを目的とした。

2. 活動の経過

【検討Ⅰ】大学生・高校生の外出アンケート

車椅子ユーザーではない高校生・大学生に、外出に関するアンケートを行った。

よく行く外出先や相手、外出時に重視している点などを質問した。よく行く外出先は、衣料品店が最も多く、同行する相手は友人が最も多かった。外出時に重視している点では、天候が最も多いことが分かった。

【検討Ⅲ】マップ作成:デザイン他

車椅子ユーザー向けのタウンガイドマップの作成を目的とした。実地調査で得られた情報をA4サイズ2枚分のマップとしてまとめた。マップ内にはQRコードを記載し、そのQRコードから動画で現地の様子を確認できるよう工夫をした。各プランごとに施設や店舗の紹介を記載した。その他、施設・店舗のバリアフリーレベルやトイレ・エレベーターの場所も記載した。

3. 考察

我々は車椅子ユーザーの若者に特化した散策マップを作成することを目的とし、プロジェクトを行ってきた。アンケート調査・実地調査を行ったことで、分かった情報を基にマップと動画の作成を行った。車椅子ユーザーの協力者と家族から「このマップなら行ってみたい・行けるかもと思えるマップになっている」という前向きな意見をいただくことができた。また、施設・店舗からも好意的な反応をいたくことができた。その一方で、静岡市内には本企画への協力が得られなかつた施設も複数あり、車椅子での外出の難しさを目の当たりにした。本マップを周知させることで、車椅子ユーザーの外出に協力できる人や施設が増えていくよう地域に働きかけることが重要であると考える。

4. 今後の展望

本企画を通じて、我々学生自身も、車椅子での外出困難について身をもって体験できた。将来、保育者になったとき、困っている子どもの視点で考えるための知識を得ることができた。今後は得た知識を、実習や学業・就職などの活動で生かしていくことができるを考える。また、本マップには、このマップを見た人が意見や感想を投稿できるQRコードを掲載した。今後、より多くの意見や感想を収集し、使いやすさについて検討していくことが課題である。

【検討Ⅱ】車椅子利用者の外出に関する調査

車椅子ユーザー4名に聞き取り調査を行った。検討Ⅰの質問に加え、車椅子での外出に関する困り感や配慮点等を質問した。

検討Ⅰと比較して、車椅子ユーザーの外出では、段差の有無や道幅、トイレやエレベーターまでのアクセスなど多面的な情報を外出時に重視していることが分かった。

【検討Ⅲ】マップ作成:動画作成

実地調査で撮影した経路の動画や店舗の写真を使用し、各プランごとに動画の作成をした。

動画の初めにメニューを入れ、見たいところに飛べるような工夫をした。動画内では、店舗までの経路や経路を進むうえでの注意点などを音声と字幕で解説した。トイレ紹介の動画をプランごとに作成した。店舗からトイレまでにかかる時間の表示・トイレ内の様子を写真を使用して説明した。



図1. 散策マップの一部

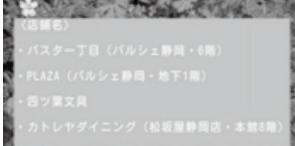


図3. 動画のメニュー画面

【検討Ⅲ】マップ作製:実地調査

アンケートの結果を踏まえて、車椅子ユーザーを想定した友達・家族・カップル・雨の日プランを作成し、実際に車椅子に乗って実地調査を行った。

各プランごと経路の動画撮影、プランに出ている店舗内の写真撮影もした。出入り口の広さやトイレまでのアクセス・かかる時間なども計測した。

【検討Ⅲ】マップの作成:修正～完成

車椅子ユーザーの協力者と家族に、作成したマップ・動画を見ていいただき、良い点・改善点をいただきました。

その意見を基に、マップ・動画の最終修正を行った。また、協力して頂いた施設・店舗にも確認をして頂いた。意見をいただいたことで、よりよいマップ・動画にすることができた。



図2. トイレ紹介動画の一部



図4. 散策マップの表紙

学内における情報スキルの支援プロジェクト 「学生の学生による学生のためのポータルサイト実践ガイドの制作」

所属： 山田 雅敏ゼミナール（情報学ゼミナール）

経営学部： 清田 裕也（代表）、石橋 初月（会計）、水谷 高彰、滝口 星波、鈴木 麗美、
杉山 真梧、加藤 亜希、安藤 巧登

1. 目的・概要

コロナ禍の昨今、大学の教育体制は大きく変化し、情報化が加速した。従来の対面授業からオンライン授業へシフトし、学生はコンピュータを利用する機会が多くなった。今後の社会情勢は不透明であるが、学内における学生への情報スキルを支援する体制の構築が早急に必要となる。一方で、約4,300名の静岡草薙キャンパスの学生数に対して、教育を支援できる教職員の人的資源には限りがあり、さらには学生視点からのマニュアルが十分に準備されていないなど課題は山積される。

そこで本プロジェクトでは、経営学部の情報学ゼミナールに所属する3年生を中心となり、学内の情報スキルを支援するバックアップ体制を整え、さらには学生視点からのポータルサイトとTeamsのガイドブックやマニュアル動画を作成することを目的とする。

2. 事業内容・方法

本活動を開始するにあたって、社会環境学部の喜久川准教授（情報システム委員長）と情報システム課の河合課長からアドバイスを頂いた。はじめに、喜久川准教授からは、「ガイドブックやマニュアル動画を作成する際に疑問に感じた場合、積極的にアンケートを取ること」、「コンテンツごとに使う場面を分けて作成すること」などのアドバイスを受けた。また、河合課長からは「パソコンのスキルがない学生にもわかるようにできるだけ専門用語を使わないこと」、「デザイン性が高いマニュアルでも、シンプルに見えるマニュアル作りを心がけてほしい」といったアドバイスを頂いた。

そこで、経営学部の学生を対象に、ポータルサイト・Teamsに関するアンケートを実施した（表1を参照）。そして表1のアンケート結果をもとに、Teamsのガイドブックで紹介するコンテンツを選定した。具体的には、「①ログイン方法」、「②画面説明」、「③チームへの入り方」、「④チーム種類」、「⑤チーム作成」、「⑥ファイルのダウンロード・アップロード」、「⑦課題提出」、「⑧提出課題の確認」、「⑨会議参加」、「⑩会議作成」とした。

なお、ガイドブックを作成するうえで、1つのコンテンツが1ページでシンプルに完結することを意識して作成した。

表1. アンケートの項目と結果

質問項目	結果（一部）
ポータルサイトを利用して、困ったことや分からぬことについて自由記述	<ul style="list-style-type: none"> 入学当初は何もわからなかった 重要な連絡を見落としていることがある 履修単位の合計が出ない
Teams を利用して、困ったことや分からぬことについて自由記述	<ul style="list-style-type: none"> 新チャネルが非表示になっていて、気づきにくいと思った Teams を開きながら、Teams にアップロードされているファイルを開けない
Word、Excel、PowerPoint、OneDrive、Outlook、Teams、Forms、その他の中から利用したことのあるアプリケーションを選択	<ul style="list-style-type: none"> Word、Excel、PowerPoint、Outlook、Teams、Forms が 20 名、OneDrive が 19 名

3. 事業成果

3. 1 マニュアルの作成

Microsoft Word を用いて Teams のガイドブック作成を行った。Teams の操作方法に鳴っていない新入生も多いと考えられることから、同ガイドブックを配信することにより学生の情報スキル操作の支援に寄与すると期待される。



図1. Teams のマニュアル

3. 2 ポータルサイトの操作マニュアルの動画制作

ポータルサイトの操作方法を説明した映像制作を行った。長時間の映像ではなく、現在、流行しているショートムービーを意識して制作を行った。

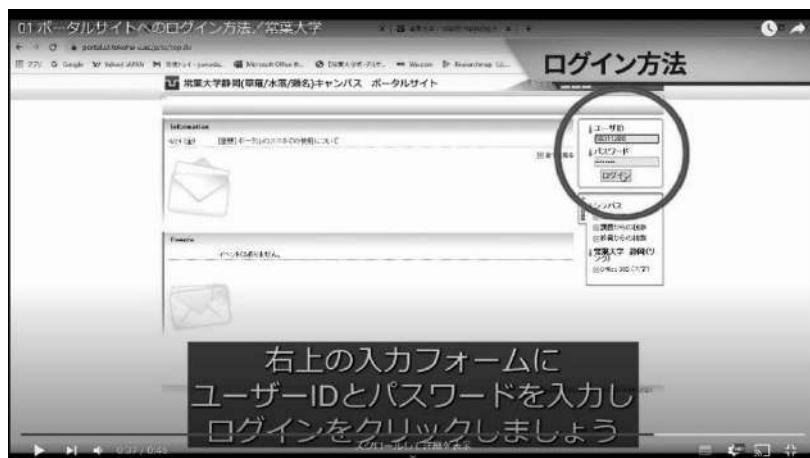
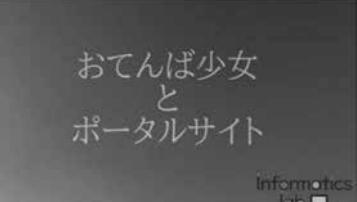


図2. ポータルサイトの動画マニュアル

3. 3 告知用の動画制作

新入生が本プロジェクトに興味を持つことを目的に、動画制作班と共同で、告知用の動画を制作している。この映像は、Stream（もしくは YouTube）を通して配信し、学生が視聴できるように設定を行う。シナリオの概要は、表 2 を参照されたい。

表 2. ゼミナールで作成した予告動画（一部）

シーン①		タイトル：おてんば少女とポータルサイト ※ 本動画は、動画制作班 4 名を中心 Final Cut Pro を用いて制作を行っている。
シーン②		ポータルサイトの「休講のお知らせ」を確認していない女子学生。授業に遅刻しそうになり、草薙駅の階段を勢いよく駆け降りる。 ※ 安全面を考慮して、一般歩行者が少ない時間帯に撮影を行った。
シーン③		教室に到着するが、教室内に誰もいなくお菓子を落とす（ポータルサイトを見ておけばこんなに走らなくても良かった…）

4. 今後の展開

今後の展開として、3月末の配信に向けて、ポータルサイトと Teams のガイドブックやマニュアルの動画をより良いものにブラッシュアップする予定である。また、今後は対面により新入生をサポートする体制を構築することも重要であると考えられる。そこで、情報学ゼミナールに所属する学生が中心となり、4月上旬に新入生を対象とした情報スキル支援の相談会開催を視野に入れている。

謝 辞

本プロジェクトを遂行するにあたり、社会環境学部の喜久川准教授（情報システム委員長）および、情報システム課の河合清和課長に貴重なアドバイスを頂きました。また、地域貢献課の職員の皆さんには、書類作成・手続き方法など丁寧にご指導、ご鞭撻賜りました。ここに謝意を表します。本プロジェクトは、常葉大学令和 3 年度常葉大学とこは未来塾—TU can Project の支援を受けたものです。

学内における情報スキル教育の支援プロジェクト

学生の学生による学生のためのポータルサイト実践ガイドの制作

清田裕也、水谷高彰、鈴木麗美、滝口星波、石橋初月、安藤巧登、杉山真梧、加藤亜希[†]

[†]常葉大学経営学部 山田雅敏ゼミナール（情報学ゼミナール）

1. 背景と目的

コロナ禍の昨今、大学の教育体制は大きく変化し、情報化が加速した。従来の対面授業からオンライン授業へシフトし、学生はコンピュータを利用する機会が多くなった。一方で、教育を支援できる人的資源には限りがあり、さらに学生視点からのマニュアルが十分に準備されていないなど課題は山積される。

そこで本プロジェクトでは、経営学部の情報学ゼミナールに所属する3年生が中心となり、学生視点からのポータルサイトとTeamsのガイドブックを作成することを目的とする。

2. 取組内容

本活動の事前準備として、社会環境学部の喜久川准教授（情報システム委員長）と情報システム課の河合課長からアドバイスを頂いた。また、経営学部の学生を対象に、ポータルサイト・Teamsに関するアンケートを実施し、配信するコンテンツを選定した。

3. 結果と考察

制作したTeamsのガイドブックやポータルサイトの操作動画のショートムービーを配信することで、学生の情報スキル操作の支援に寄与すると考えられる。



図 1. Teams のガイドブック

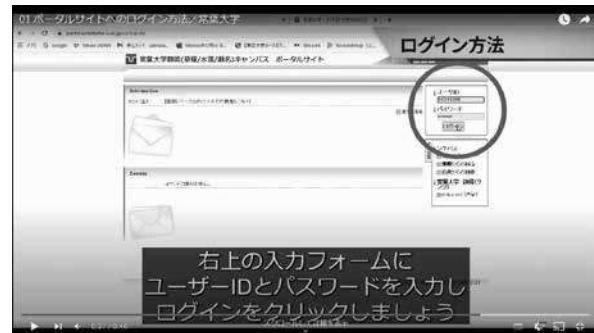


図 2. ポータルサイトの操作動画

また、新入生が本プロジェクトに興味を持つことを目的として、動画作成班と共同で、告知用の動画を制作している(2月3日現在)。

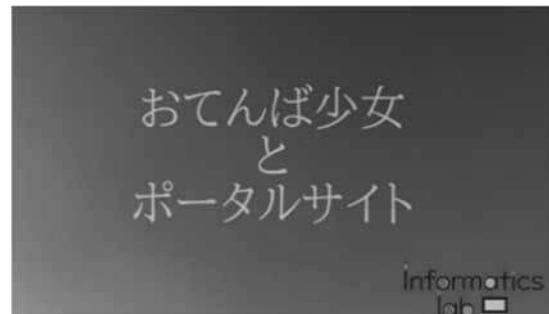


図 3. 告知用の動画制作の画面

4. 今後の展望

ポータルサイトとTeamsのマニュアル・動画制作は進行中であり、3月末の完成を目指す。また、4月上旬に新入生を対象とした情報スキルの支援をするための相談会開催を視野に入れている。

謝辞 本プロジェクトを遂行するにあたり、社会環境学部の喜久川准教授（情報システム委員長）、情報システム課の河合清和課長、地域貢献課の職員の皆さんには、ご指導、ご鞭撻賜りました。ここに謝意を表します。

親子で学ぶスポーツ外傷対策（ウェビナーで学ぶアクティブレスト）

所属：眞鍋ゼミ（健康プロデュース学部健康柔道整復学科）

丹野力斗（代表）武田健太 小池一樹 勝又大 岡村和姫

1. 目的・概要

本事業の目的は以下の2つである。

- ① **地域児童に対するスポーツ外傷予防啓発活動**：発育期のスポーツによる怪我は成人の怪我とは異なり、普段のケアが予防に大きく貢献する。小学生では膝や踵に慢性的なストレスが加わり痛みや機能低下を招きやすい。成人とは異なり、小学生は医学的な知識に乏しいため、どのようにケアを実施するか理解していない可能性がある。これは、スポーツ経験が少ない保護者も同様である。そこで本事業では、健康柔道整復学科で学ぶ、発育期に多く発生するスポーツ外傷を調査し、児童及び保護者も理解しやすいケア方法を提供することを目的とした。
- ② **コロナ禍でも「伝える」力を身に着ける**：2019年から世界的なパンデミックとなっている新型コロナウィルス感染症は、拡大と収束を繰り返し、今後も緊急事態を強いられる可能性は非常に高い。感染症対策により、対面によるイベント実施が制限される中で、情報発信ツールを有益に使用する能力は今後必ず必要となる。そこで、この企画を通して外傷予防に関するオンラインイベントの開催ノウハウを身に着けることを目的とした。

2. 授業内容・方法

本事業では、地域スポーツ少年団（ミニバスケットボールクラブ）に対し、オンラインによる外傷予防webセミナーを実施する。実施するにあたり、以下のような準備を行った。

- ① **小学生で発生しやすい外傷の調査・資料作成**：小学生は成人に比べ、骨組織が柔軟であり、体重や力も弱いことから、成人とは異なる外傷が発生しやすい。調査の結果、捻挫や脱臼などの急激な力が加わる外傷は少なく、繰り返しのストレスによる所謂「障害」が多いことが報告されている。このセミナーはミニバスケットボール選手が対象であるため、さらにバスケットボールによるスポーツ障害に焦点を当て、「オスグット病」「セーバー病」に障害を絞り、セミナーで紹介する資料を作成した（図1）。
- ② **ATEMmini（スイッチャー）を用いたセミナー方法**：本セミナーは、オンライン授業等で使用するZoomを使用して配信を行った。通常はwebカメラで配信者を映しセミナーを開いていくが、小学生や保護者に、なるべく分かりやすい情報を提供するためにスイッチャーを使用し、3つの画面を担当者が適宜スイッチする方法を採用した（図2）。司会者画面・パワーポイント画面・施術者画面の3つを画面を参加者に視聴させることができあり、今回のセミナーのみならず、今後このようなイベントをオンラインで進行する際に、必ず必要となる配信スキルをゼミ生が共有した。

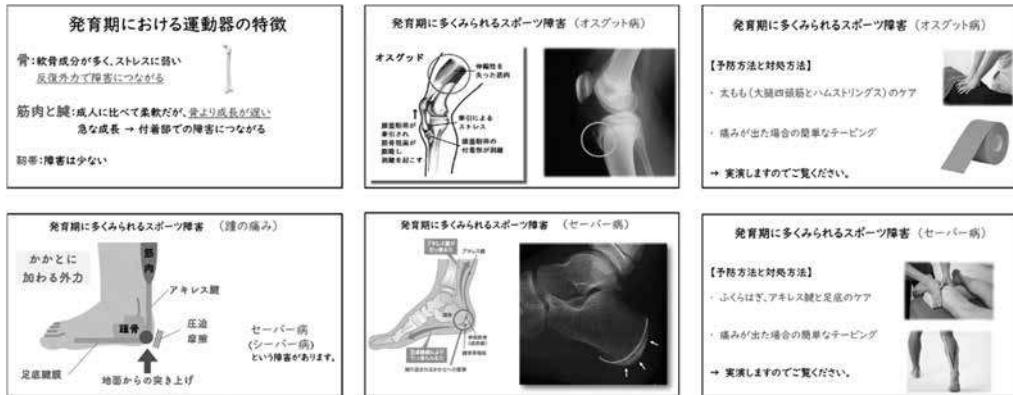


図1. セミナーで使用したパワーポイント資料

今回のセミナーは、井伊谷小学校、気賀小学校、細江小学校の児童が参加しているミニバスケットボールクラブにセミナー参加の依頼を行った。募集方法は、スポーツ少年団グループLINEに参加し、告知及びZoomIDの添付を行った。また、アドバイザー教員に依頼しミニバスケットボール指導者に口頭にてイベント告知を行った。

人員配置として、司会者1名、スイッチャー担当1名、カメラ撮影2名、患者モデル1名の計5名で行った。アドバイザー教員にはテーピングの模範施術を依頼した。

セミナーは令和3年12月16日19時～20時で開催した。(写真①)

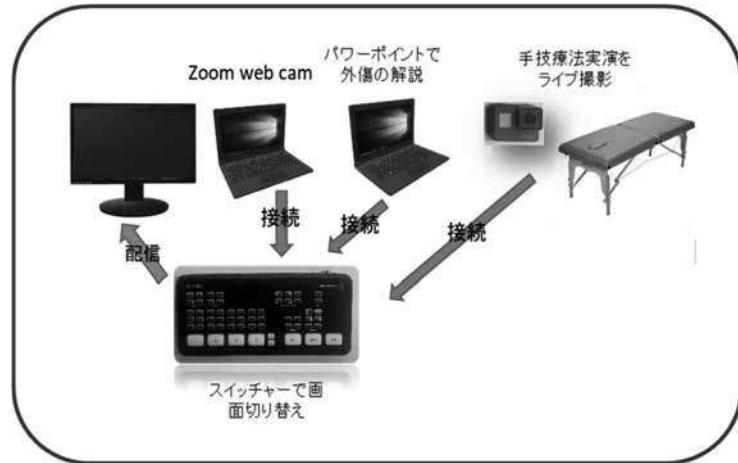


図2. セミナー配信方法の略図

3. 事業成果

本事業を行った結果、セミナーには途中退席も含めて 10 家庭が参加し、30 名程が視聴した。セミナーを行った結果、以下のようなご意見を頂いた。

- ・膝と踵の痛みを持っていたが、今まで放置していた。今後学んだケアを実践したい。(保護者)
- ・テーピングは簡単だったので、次回から巻いて練習を参加させたい(保護者)
- ・ストレッチは知っていたが、セルフマッサージは知らなかった。(児童)
- ・お風呂に入りながら参加できた。(保護者)
- ・画面の移り変わりがテレビみたいで面白かった。

また、以下のような今後検討が必要となるご意見も頂いた。

- ・途中で画面が途切れてしまった。→カメラのバッテリー切れ
- ・個別に質問したかったが、他の家庭も参加しているのでできなかった。(保護者)
- ・膝と踵以外も聞きたかった。(児童)
- ・栄養学に関するセミナーを合わせてほしい(保護者)

課題点として、今回は Zoom 無償版での実施であったため、配信時のアンケート集計等が実施できなかった。しかし、セミナー終了後にアドバイザー教員宛に上記のような意見を頂くことができた。

4. 今後の展望

今回のセミナーで頂いた意見を集約し、眞鍋ゼミでは、引き続き後輩達が地域住民に向けたセミナーを発信できるよう、開催方法をまとめた資料作りを検討している。また、課題点である有料版ライセンスの費用等、予算に係る問題も検討する必要がある。

次年度の検討事項として、参加者からの頂いた意見のように、栄養学に関する内容とスポーツ外傷を併用して企画を考えている。今回のセミナーで凡そその開催方法を学習したため、そのノウハウを活かし、他学科との共同企画も検討している。



写真①：12月16日イベント実施前と実施中の風景

【背景】

健康柔道整復学科では3・4年次に「ここは鍼灸接骨院」にて臨床実習を行っている。実習時に来院する多くの患者はアスリートであり、受傷する前のケアを適切に行っていれば予防できた外傷が印象的であった。また、成長期に受傷したスポーツ外傷の後遺症に悩む患者も多々見られた。そこで真鍋ゼミでは、現在までに学習した柔道整復学や解剖学を基に、受傷を未然に防ぐための適切なケア方法を、地域住民にwebセミナー形式で開催することにした。

【目的】

①成長期から増加するスポーツ外傷を予防するうえで a.今後起こりうる外傷を知る
b.アクティブルート に焦点をおき、私達が学習した知識を地域小・中学生または保護者に知つてもらうことを目的とした。

②現在コロナ禍は収束に向かいつつあるが、また一つ同じような事態に直面するか分からない。真鍋ゼミでは、オンライン講義の改善点を検討し、受講者が限りなく理解しやすいセミナー形式の構築を目的とした。

【方法・内容】



- ① アドバイザー教員とセミナー開催方法について検討を行った。また、引佐ミニバスケットボールクラブのグループlineに参加し、Zoomによる開催告知を行った。
- ② ATEMmini及び各種ケーブルをアドバイザー教員に準備してもらい、納品後機器の使用方法を確認した。
- ③ 12月16日19時～セミナーをZoomにて開催した。司会者1名、カメラマン2名、スイッチャー担当1名、患者モデル1名の計5名で実施した。アドバイザー教員には、テeing方法の模範実技を依頼した。実施後アドバイザー教員のlineに参加者からの感想を受け、集約した。

【結果】

参加者として、10家庭(途中退室あり)30名程が参加した。参加者からは以下のようない見を頂いた。

・都と他の痛みを持っていましたが、今まで放置していた。今後手など力を過度にしない。(保護者)
・テレビингは出来たのですが、実回から音いて練習を参加させたい。(保護者)
・スイッチは切っていたが、セルフマッサージは組らなかった。(児童)
・お風呂に入りましたが、セルフマッサージは組らなかった。(児童)
・画面の移り変わりがテレビみたいで面白かった。(児童)
・途中で画面が途切れてしまった。一カメラのバッテリー切れ
・倒れは見聞したかったが、他の家庭も参加しているのでできなかった。(保護者)
・都と海以外も開けたかった。(児童)
・栄養学に関するセミナーを貰わせてほしい。(保護者)

児童や保護者からは、方法のパワーポイント資料と実演カメラが、上手く切り替えられており理解しやすかったとの意見を頂いた。

【今後の課題・感想】

今回のセミナーでは、バッテリー切れやアンケート収集ができないアクシデントが発生した。今後は機器使用方法のリハーサルや異なる方法でのアンケート収集を検討する必要がある。また、参加者からは栄養学とのコラボレーション企画を希望する意見も頂いた。総合大学のスケールメリットを活かし、スポーツ外傷予防に様々な学問をプラスして企画を検討したい。

また、今回のセミナーでは今まで使用したことの無い機材を用いて配信を行った。コロナ禍において、今後はこういった取り組みが当然必要となり、ここは未来塾を通してコロナ禍における情報発信の対応力が養われたと実感している。

届け！地元の味 目指せ！健康増進

所属：栄養学科クッキー開発チーム

健康プロデュース学部健康栄養学科 岡田和香奈（代表） 佐藤ひばり 五明綾香
清水夢加

1. 目的・概要

私たちは、令和元年に健康栄養学科の先輩方が地元の野菜と果物を使用したからだに優しい「どこはクッキー」を開発し、商品化を目指したが実現できなかつことを知った。そこで、先輩方の取り組みを継承し、さらに私たちのアイデアを加えた「新どこはクッキー」の商品化を目指したいと考えた。後に、「(やさい) クッキー」と称した。今回も若者の野菜摂取への興味や健康に対する意識を高める取り組みというコンセプトのもと、新たな地元洋菓子店と連携し、更に良いものをつくるため、クッキーの形やパッケージのコーディネート、私たちの思いを込めたメッセージカードなどを作成した。また、クッキーを入れるパッケージは商品イメージを伝えるツールとして大変重要であるため、商品の顔となるパッケージ（帯）のデザインの制作を造形学部の学生に依頼し、オリジナル商品としての価値をより高めることができるよう企画した。若い世代に野菜の摂取に関心を持ってもらえるきっかけとなるクッキーの開発を目指す。

2. 事業内容・方法

1) 「(やさい) クッキー」の開発（写真1）

クッキーの開発は地元洋菓子店ラムセスさんの協力のもと、8回以上の試作と改良を重ね、味、色、形などから野菜をイメージしやすくなることを考えて取り組んだ。試作品を受け取り、チーム検討会にて意見交換を行いより良いものを目指した。

開発する中で、適切な情報交換ができるおらず意見が食い違うこともあったが、お互いが納得するまで話し合い検討を重ねた。

2) 常葉大学健康栄養学科の学生にアンケート調査を実施

令和3年7月27日に健康栄養学科の学生を対象に、開発中のクッキー試作品についてアンケート調査を行った。アンケート内容は「(やさい) クッキー」から受けるイメージと、学生自身の野菜摂取状況について調べた。

3) パッケージ（帯）デザインとメッセージカードの制作

(帯) デザインは、どんな野菜を使用したクッキーであるのか伝わること、若者の野菜摂取に対する意識が向上することと注目度を高め、手に取ってみたくなるようなデザインを目標に、本学造形学部の学生に制作を依頼した。造形学部学生の専門的なデザイン知識



写真1 ラムセスさんと打ち合わせ

とセンスにより、野菜と果物をモチーフとしたオリジナルデザイン3案が提案された。さらに、私たちの思いを込めたメッセージカードを合わせて制作した。

4) 大学生交流フェスタでアンケートの実施と野菜摂取増進の取組み

完成した「(やさい) クッキー」を多くの方に知っていただき、野菜摂取や健康に関心を高めてもらいたいという目的のため、令和3年11月21日浜松市アクト通りで開催された大学生交流フェスタにおいて、「(やさい) クッキー」と帶を付けたパッケージと併せて展示し、一般来場者を対象にアンケート調査を実施した（写真2）。

実施内容は、①クッキーに関するポスターの掲示、②带デザイン3種類の展示、③本プロジェクトの概要の説明とアンケート調査の依頼、④アンケート回答者へ「(やさい) クッキー」の無料配布を行った。

アンケート内容は「(やさい) クッキー」と带デザインについて、野菜摂取への意識向上効果を調べた。アンケート調査 写真2 大学生交流フェスタの様子 終了後、データの集計と結果分析を行い、今回のプロジェクトの目的が達成できているかをチームで検討した。



3. 事業成果

1) 「(やさい) クッキー」について

開発した「(やさい) クッキー」（写真3）の種類はじゃがいも、ほうれん草、かぼちゃ、みかん、いちごの5種類に決定した。

「(やさい) クッキー」の特徴は、ふんだんに野菜・果物パウダーを使用することで、素材の持つ本来の味や香りを感じもらうことができる点である。さらに、マーガリン、ショートニング、着色料を使用していないため健康的である。



写真3 「(やさい) クッキー」

2) 「(やさい) クッキー」に関するアンケート調査

(1) 健康栄養学科の学生22名から回答を得た。結果は、「(やさい) クッキー」から“健康をイメージできるか”という質問について、できる73%、できない27%であった。また、「(やさい) クッキー」の試食後に尋ねた“野菜への関心は高まるか”については、高まる82%、高まらない18%であった。

(2) 大学生交流フェスタでは、一般来場客175名から回答を得ることができた。「(やさい) クッキー」から“健康をイメージできるか”については、できる91%、できない9%であった。また、“野菜への関心度は高まるか”については、高まる98%、高まらない2%であった。この他に、「野菜の味がして美味しかった」、「クッキーをきっかけに野菜を食べようと思った」など好意的な意見を頂いた。

以上の結果から、本プロジェクトで開発した「(やさい) クッキー」は、健康をイメージすることができ、野菜への関心も引き出すことができることがわかった。

3) 造形学部提案の3つのパッケージ(帯)デザインについて

提案されたパッケージ(帯)デザインは、「あざやか」、「グラデーション」、「やわらか」の3種類であった(写真4)。さらに、私たちのクッキーへの思いを込めたメッセージカードを添えた(写真5)。



写真4 パッケージ(帯)デザイン

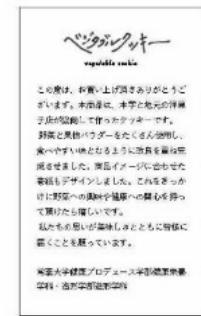


写真5 メッセージカード

大学生交流フェスタにおいて、3つの帯デザインの中でどれが「(やさい) クッキー」のイメージに合っているかと思うかを調査したところ、「あざやか」43%、「グラデーション」26%、「やわらか」31%であった。結果より、「あざやか」の明るい色調のデザインが好まれる傾向にあった。このアンケートを参考に検討した結果、帯デザインは「あざやか」に決定した。

本プロジェクトは、健康栄養学科、造形学部の学生と地元洋菓子店が協力したことでの「(やさい) クッキー」を常葉オリジナル商品として完成させることができたと思う(写真6)。また、アンケート調査結果から、「(やさい) クッキー」を通じて若者の野菜への興味や健康に対する意識を高めることができると実感した。そして、地元野菜や果物などの地域特産品に関心を持つ機会を拡げ、地域活性化につなげるきっかけにはなるのではないかと考える。



写真6 完成した「(やさい) クッキー」

4. 今後の展開

今回協力して頂いた洋菓子店は個人で製造から販売まで行っているため、実際に商品化した場合販売価格が高くなること、製造・販売にかかる時間の負担が大きいなどの問題点があることを知ることができた。また、今回の取り組みを通じて、多くの人と協力して商品をつくることの難しさと楽しさを学ぶことができた。この経験で得た知識、行動力、コミュニケーション力は商品開発の分野だけでなく、今後、他の場面でも活かしていくといい。そして、常葉オリジナル商品「(やさい) クッキー」に込めた私たちの思いがたくさんの人々に届くことを願う一方、商品としての販売には至っていないことが残念である。

届け！地元の味 目指せ！健康増進

常葉大学 栄養学科クッキー開発チーム
岡田和香奈(代表) 佐藤ひばり 五明綾香 清水夢加

令和元年に健康栄養学科の先輩が地元の野菜と果物を使用したからだにやさしい「とこはクッキー」を開発、商品化を目指していたが実現していない。この取り組みを継承し、私たちのアイデアを加えた「新とこはクッキー」の商品化を目指したいと考えた。

目的

野菜が不足気味な若者の野菜への興味や健康に関する意識を高めてもらう

「とこはクッキー」

<提案>

- ・クッキーの味・色・形の改良
- ・パッケージのトータルコーディネート
- ・メッセージカード追加

「新とこはクッキー」の商品化

共同開発

地元洋菓子店ラムセス
造形学部学生

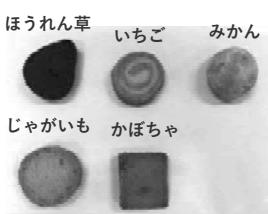
常葉大学からの商品発信が地域特産品を知ることや
健康への関心強化、さらに地域の活性化につなげたい

取り組み内容

月	実施内容	詳細
2021 4~10	<ul style="list-style-type: none"> ■ 試作と打ち合わせ ■ 新とこはクッキーの決定 ■ 学内アンケート調査 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 地元洋菓子店ラムセスさんと打ち合わせ8回と改良依頼6回を重ね、自分たちの考えるクッキー5種類を完成させた。 ■ 改良したクッキーの名前は「(やさい) クッキー」とした。 ■ クッキー試作品を健康栄養学科学生22名にアンケート調査を実施した。
10~11	<ul style="list-style-type: none"> ■ パッケージデザインの依頼と打ち合わせ 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 本学の造形学部に、自分たちの要望を取り入れた帯デザインを依頼し、3回の打ち合せ後、帯デザイン3つが提案された。
11	<ul style="list-style-type: none"> ■ 大学生交流フェスタ ■ 帯デザイン決定 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 大学生交流フェスタでは、一般来場者175名に野菜摂取と帯デザインについてアンケート調査を行い、回答者にクッキー配布をした。 ■ アンケート結果を参考に帯デザインを決定した。
2022 12~1	<ul style="list-style-type: none"> ■ アンケート集計とまとめ 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 学内と大学生交流フェスタで実施したアンケート集計とまとめを行った。

結果・考察

1. 開発した「(やさい) クッキー」は、じゃがいも、ほうれん草、かぼちゃ、みかん、いちごの5種類に決定した(写真1)。



2. 帯デザインは「あざやか」「グラデーション」「やわらか」3案のうち、「あざやか」に決定した(写真2)。

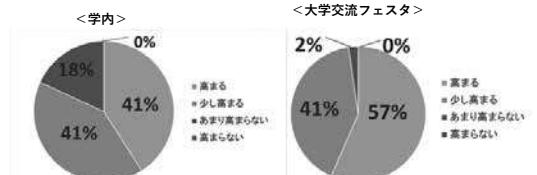


3. アンケート調査のまとめ

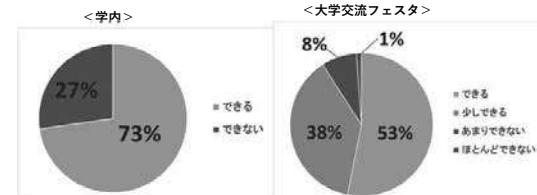
「(やさい) クッキー」から野菜への関心が高まった、健康をイメージできると答えた人が多かった。このことから、「(やさい) クッキー」を通じて若者の野菜への興味や健康に対する意識を高めることができると考えられる。

しかし、学内結果では大学交流フェスタ参加者よりも「できない」と回答する割合が多かった。その理由として、対象者にクッキーの情報（材料や工夫など）を伝えていたためと考えられる。これを踏まえて、クッキーに関するポスターの掲示や本プロジェクトの概要の説明を行うことが重要であると考えられる。

Q1. 「(やさい) クッキー」から「健康」をイメージできますか？



Q2. 「(やさい) クッキー」から野菜への関心度は高まりましたか？



今後の展望

今回協力して頂いた洋菓子店は個人で製造から販売まで行っているため、実際に商品化した場合販売価格が高くなること、製造・販売にかかる時間の負担が大きいなどの問題点があることを知ることができた。また、今回の取り組みを通じて、多くの人と協力して商品をつくることの難しさと楽しさを学ぶことができた。この経験で得た知識、行動力、コミュニケーション力は商品開発に分野だけでなく、今後、他の場面でも活かしていきたい。そして、常葉オリジナル商品「(やさい) クッキー」(写真4)に込めた私たちとの思いがたくさんの人々に届くことを願う一方、商品としての販売には至っていないことが残念である。



地域連携型・小学生防災体験活動「あそまなぼうさい」の実践活動

所属：3.11 はままつ東北復光プロジェクト

伊藤萌(代表) 長谷川小町 石井千景 生駒嶺英 今田悠月 滝元葵月
中村夏実 藤井杏夏里 水口小夏

1. 目的・概要

東日本大震災から10年が経過した。時間が経つとともに人々の記憶と関心が薄れ、震災を知らない子どもたちも増加傾向にある。そこで本プロジェクトでは、震災の記憶を忘れないために、また地域で起こり得る防災に対して強い関心を持ってもらうために、小学校PTAと連携し、小学生を対象とした防災体験活動「たのしくあそまなぼうさい」を行う。

また体験活動が終わった後も、震災・防災についての知識の定着、家族内での防災知識の共有を図るために、「防災ハンドブック」を作成し、配布する。

これからの中を担う子どもたちと共に東日本大震災について振り返り、未来に起こる可能性の高い防災・減災について、身近なこととして考え、命を守る行動、震災時重要な地域社会との関わりの強化に繋ぐための機会の提供を目的とする。

2. 事業内容・方法

本事業では、以下の3つの事業を実施した。

① 防災ハンドブック作成

震災・防災についての知識の定着、家族内での防災知識の共有を図る、災害が起きた際に活用してもらう目的で、「防災ハンドブック」を作成した。小学校低学年でも簡単に理解できる内容（避難のルール、非常食など）の防災ハンドブックを作成した。イラストを多く使い、難しい言い回しはせず簡単な説明にし、難しい漢字にはふりがなをつけることで分かりやすくなる工夫をした。また、○×クイズや実際に必要なものを書き込むページを取り入れることで、震災・防災についての知識の定着、家族内での防災知識の共有のきっかけになるように工夫した。防災ハンドブックは、わが町はままつ大学生交流フェスタ2021の来場者、浜松市立飯田小学校へ配布を行った。また3.11復光キャンドルナイトでも配布する予定である。



② 防災動画作成

非常食の説明、非常食を実際に調理したものの紹介、ローリングストックの方法などを動画にし、調理の動画を入れることで児童の興味関心や防災意識の強化に努めた。また、簡単にできる方法を紹介することで、いつ起こるか分からない災害に向けて自分ごととして防災について考えたり、災害が起きた際に自分には何ができるのかを改めて考えたりするきっかけを作ることができた。新型コロナウイルスの感染拡大のため、予定していた浜松市立飯田小学校での防災体験活動「たのしくあそなぼうさい」は開催することはできなかったが、防災動画を作成・提供したことによって対面での活動が行えなくてもできる防災学習の機会の提供ができた。

③ わが町はままつ大学生交流フェスタ 2021

小学校での防災体験活動「たのしくあそなぼうさい」の代替え案として「わが町はままつ 大学生交流フェスタ 2021」に参加し、ブース出展した。昨年好評だった3.11復光キャンドルナイト写真展、防災ハンドブックの配布、浜松から思いを届けるメッセージカード（書いてもらった後はキャンドルの装飾として使用する）の制作、子ども達にもっと震災や防災・減災に関する知識、関心、意識を、楽しみながら深めてもらうための防災ゲーム（SDGs 防災かるたなど）の実施、身体を動かして体験してもらう防災ダック、バケツリレーなどを行った。写真展では、第1回から第10回目の3.11復光キャンドルナイトの活動写真やテーマとなった文字の写真等を展示した。多くの来場者が足を止めて鑑賞してもらう機会となった。



〈工夫〉

イベント実施においては、来場者が安心・安全に参加できるように、除菌や会場の導線、椅子や机の配置などを工夫し、3密を避けるようなブース作りを行った。

新型コロナウイルスの感染拡大のため、予定していた小学校での防災体験活動は開催することはできなかったが、防災動画を作成したことによって対面での活動が行えなくてもできる防災学習の機会の提供をした。

3. 事業成果

「わが町はままつ 大学生交流フェスタ 2021」で行った防災ゲームでは、参加してくれた 17 人の子どもたちにアンケートを行い、「防災について楽しんで学べたかな？」の問い合わせには、17 人全員が「楽しかった」と答えた。このことから防災ゲームやメッセージカードの作成、本団体が行ってきた活動写真の展示を通じて防災・減災の興味関心を持たせるきっかけ作りになったと考える。

本事業を通して、防災ハンドブック・防災動画や防災ゲーム、本団体が行ってきた活動写真を通じて、市民に災害について考えてもらい、防災・減災の重要性を伝えることができた。

「わが町はままつ 大学生交流フェスタ 2021」は「アクト通りふれあいデイ」と同日開催だったため大変多くの方が来場していた。今まで 3.11 はままつ東北復光プロジェクトのことを知らなかった人たちにも、活動等を知ってもらう、よい機会となった。

4. 今後の展望

今回、ハンドブックを配布や動画の作成・提供をすることにより、家庭でも防災減災について話し合う機会の提供に繋がったと考える。新型コロナウィルス感染症の影響を受けて、何度も計画を変更しなければならなくなつたが、メンバー同士で新たな企画を考え、知恵を出し合うことができたことは災害時の臨機応変な対応にも通じるものであり、貴重な機会となった。

東日本大震災から 11 年が経過し、過去のものとして忘れ去られようとしている今、3.11 を風化させないために、これまで私たちが活動・経験してきたこと、活動から得られたことを、震災を知らない世代を始め多くの人々に発信していきたいと考える。

今後もコロナ禍での活動が続くため、オンラインなどを活用しながらできる工夫を考え、活動を継続していきたい。

連携団体

- ・浜松市市民協働センター
- ・浜松市内大学地域貢献ネットワーク
- ・浜松市立飯田小学校

小学生防災体験活動「たのしくあそまなぼうさい」の実践活動 常葉大学 3.11はままつ東北復光プロジェクト

【目的】

これからの中学生を担う子どもたちと共に東日本大震災について振り返り、未来に起こる可能性の高い防災・減災について、身近なこととして考え、命を守る行動、震災時重要な地域社会との関わりの強化に繋ぐための機会の提供を目的とした。

新型コロナウイルスの感染拡大のため、予定していた小学校での活動、トコリンピックは中止となつたが、「防災ハンドブック」「防災動画」の作成や新たなイベントの企画を計画することはできた。

【わが町はままつ大学生交流フェスタ2021】

代替え案として「わが町はままつ 大学生交流フェスタ2021」に参加し、ブース出展した。昨年好評だった3.11復光キャンドルナイト写真展、防災ハンドブックの配布、浜松から思いを届けるメッセージカード（書いてもらった後はキャンドルの装飾として使用する）の制作、子ども達にもっと震災や防災・減災に関する知識、関心、意識を、楽しみながら深めてもらうための防災ゲーム(SDGs防災かるたなど)の実施、身体を動かして体験してもらう防災ダック、バケツリレーなどを行った。参加してくれた17人の子どもたちにアンケートを行い、「防災について楽しんで学べたかな？」の問い合わせには、17人全員が「楽しかった」と答えた。このことから防災ゲームやメッセージカードの作成、本団体が行ってきた活動写真を通じて防災・減災の興味関心を持たせるきっかけ作りになったと考える。



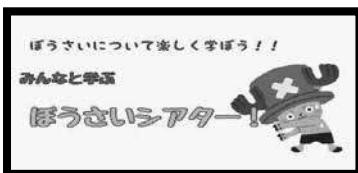
わが町はままつ 大学生交流フェスタ2021の様子

【たのしく学ぼう防災ハンドブック】

小学生低学年でも簡単に理解できる内容の防災ハンドブックを作成した。わが町はままつ大学生交流フェスタ2021の来場者、浜松市立飯田小学校へ配布を行った。また3.11復光キャンドルナイトでも配布する予定である。



作成した防災ハンドブック



【防災動画】

小学生でも簡単に理解できる内容の防災動画を作成した。浜松市立飯田小学校に配布した。ハンドブックとともに、防災学習に役立ててもらう予定である。

作成した防災動画

【今後の展望】

今回、ハンドブックを配布や動画の作成・提供をすることにより、家庭でも防災減災について話し合う機会の提供に繋がったと考える。新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、何度も計画を変更しなければならなくなつたが、メンバー同士で新たな企画を考え、知恵を出し合うことができたことは災害時の臨機応変な対応にも通じるものであり、貴重な機会となった。東日本大震災から11年が経過し、過去のものとして忘れ去られようとしている今、3.11を風化させないために、これまで私たちが活動・経験してきたこと、活動から得られたことを、震災を知らない世代を始め多くの人々に発信していきたいと考える。今後もコロナ禍での活動が続くため、オンラインなどを活用しながらできる工夫を考え、活動を継続していきたい。

高齢者を守る！特殊詐欺被害防止ハンドブックの教材作成

所属：木村ゼミ

健康プロデュース学部心身マネジメント学科 北島渓太（代表）田村 飯田 大橋
加藤 柴崎 田中 松井 市川 遠藤 佐藤 高林 中川 根上 藤原 水口 脇坂

1. 目的・概要

2020 年度の特殊詐欺被害総額は 277 億円（警視庁, 2020）にも上ったと発表されており、被害の防止が話題になっている。本ゼミでは、昨年度、浜松市との大学との連携事業で「特殊詐欺すごろく講座を実施し、好評を得た。この講座はすごろく形式で特殊詐欺被害に関するクイズを解きながら学んでもらう講座で大学生が手作りした印刷冊子を配布したが、知識の定着や講座が終了した後も、詐欺に気をつけてもらうには、教材の工夫が課題として残った。

当初、本事業では、引き続き、浜松市との連携のもと、大学生が講座を行う予定であったが、新型コロナウイルスの流行で緊急事態宣言が発令されたため、「大学生による特殊詐欺撃退講座」を行う事ができなくなった。代替として、講座の動画を作成し、YouTube で誰もがいつでも見る事ができるようにした。また、作成したハンドブックは静岡県警察と市内協働センターで配布してもらった。

本事業では、特殊詐欺について理解を深め、被害件数を減少させるために有効なハンドブックを作成し、知識の定着を図り、高齢者が自分事として特殊詐欺を学んでもらうこととした。

2. 事業内容・方法

本事業では、以下の事業を実施した。

① 特殊詐欺撃退ハンドブックの作成

特殊詐欺についての教材研究を行う。論文や著書などから資料収集し、特殊詐欺や高齢者の認知機能などについて情報収集し、特殊詐欺に関する教材を開発した。

② 大学生による講座の動画作成

昨年度、高齢者に対して特殊詐欺講座を行った際に使用した発表スライドをもとに最新の情報も交え動画を作成し、YouTube で配信した。

URL : <https://youtu.be/Et7d5v20zLU>

③ 現役警察官へのアンケート調査

現役警察官 100 名を対象として、作成したハンドブックと大学生による講座の動画の有効性についてのアンケート調査を行った。

3. 事業成果

① 特殊詐欺撃退ハンドブック

全8ページA4冊子構成となる「特殊詐欺撃退ハンドブック」を作成した。文字やイラストを使用し各ページに特殊詐欺の種類や事例などを盛り込んだものを作成した。

ハンドブックの構成は、表紙（図1）、1P-2Pではどの種類の詐欺に騙されやすいかを認知してもらうための詐欺チャート（図2）、3Pではオレオレ詐欺事例と対策、4Pでは還付金詐欺事例と対策、5Pでは新型コロナウイルスワクチンに関する詐欺事例と対策、6Pでは特殊詐欺全般における今からでもできる詐欺対策（図3）、裏表紙で作成した。



図1：表紙

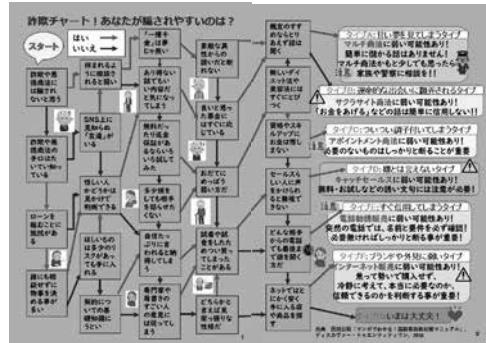


図2：詐欺チャート

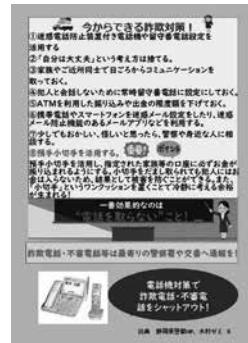


図3：今から出来る対策

② 大学生による講座の動画作成

特殊詐欺撃退ハンドブックと、併せて見る事で特殊詐欺について深く理解することができる特殊詐欺防止動画を作成した。動画の視聴時間は23分間で、導入、クイズ、特殊詐欺についての説明・実演、対策と心構え、まとめという構成である。この動画は特殊詐欺について高齢者が分かりやすく理解できるように、また動画を視聴した後から特殊詐欺被害防止に役立つように、静岡県警察の取り組みに関連した内容を意識し、警視庁及び内閣府のデータをもとに作成した。

動画の構成は、特殊詐欺についてクイズを解くことで理解を深める特殊詐欺クイズと、特に被害が多発している詐欺について詐欺の手口や犯人がどのようなやりとりで高齢者から金銭を騙し取りに来るのかを再現した大学生による演劇を取り入れながら詳しく解説をした。また、特殊詐欺の被害に遭わないようにするためのポイントや対策についてもスライドを用いながら説明している。

③ アンケート調査の結果と考察

アンケート調査でハンドブックは97%、特殊詐欺防止動画は92%が有効であるという回

図4：特殊詐欺クイズ

答を得た。ハンドブックに関しては「自分で読むことで能動的に特殊詐欺について学ぶことができる」「啓発グッズとして有効だと思う」などの意見がありハンドブックの存在自体が重要視されている事が考えられた。一方、「文字が多くすぎる」「情報量が多い」などの改善も必要なことが明らかになった。動画は、「文字と音声により、視覚・聴覚から同時に情報を得ることが出来る」「大学生が特殊詐欺の手口を実演していて分かりやすい」などの意見が挙げられた。動画で見る事で特殊詐欺についてイメージしやすいと考えられた。しかし、「動画をみてもらうまでが難しい」「高齢者は動画に慣れていない」などの意見もあり、課題があることが明らかになった。

ハンドブックの配布場所や特殊詐欺防止動画の活用場所としてどこが適切かを質問したところ「メディアの出演」「高齢者施設」「公共交通機関」「金融機関」「地域での配布」などが挙げられた。今回の活動では静岡県警察と市役所、協働センターに配布を行ったが、今後さらにハンドブックや特殊詐欺防止動画を広く認知させていくためには、アンケートで回答のあった場所での配布や活用をしていくことが必要であると考えられる。

大学生と警察との連携の重要性については、96%が有効であると答えている。実際の意見として、「警察官だけで活動していくには限界があり、官民協働で啓発活動をしていく必要がある」などが挙げられた。今後はより大学生と警察の連携を強めていくことが必要であり官民協働で特殊詐欺防止に取り組んでいくことが重要であると考えられた。

4. 今後の展開

本事業では静岡県警察との連携で特殊詐欺撲滅ハンドブックと大学生による講座の動画作成を行った。アンケート調査では、ハンドブック、動画共に有効であるという結果が出たが、いくつかの改善点もあげられたことから、それらを改善しブラッシュアップしていくことが今後の課題である。また、今年度は高齢者対象の講座ができなかったことから、ゼミの後輩に引き継ぎ、実施にむけての準備とコロナ禍でもできる防犯活動を地域や警察署と連携し、取り組んでいきたい。

参考文献

- 1) 警視庁ホームページ,特殊詐欺とは
<http://www.keishicho.metro.tokyo.lg.jp/kurashi/tokushu/furikome/furikome.html>（2021年11月19日取得）
- 2) 警察庁ホームページ,特殊詐欺認知・検挙状況等について
<https://www.npa.go.jp/publications/statistic/sosa/sagi.html>（2021年10月1日取得）
- 3) 静岡県警察,ご存じですか?「預手プラン」
<http://www.pref.shizuoka.jp/police/kurashi/sagi/yote.html>（2020年8月5日取得）
- 4) 静岡県警察,特殊詐欺の防犯対策
<http://www.pref.shizuoka.jp/police/kurashi/sagi/index.html>（2020年8月5日取得）
- 5) 西田公昭,『マンガでわかる!高齢者詐欺対策マニュアル』,ディスカバートゥエンティワン,2016,



高齢者を守る！特殊詐欺被害防止ハンドブックの教材作成

常葉大学 健康プロデュース学部心身マネジメント学科 木村ゼミ

①はじめに

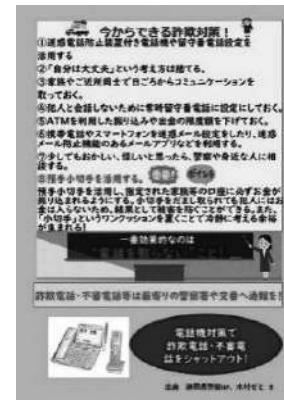
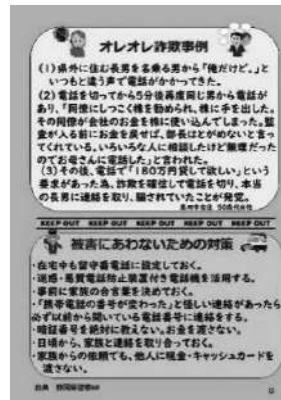
2020年度の特殊詐欺被害総額は277億円(警視庁,2020)にも上ったと発表されており、被害の防止が話題となっている。本ゼミでは、すくろ形式で特殊詐欺被害に関するクイズを解きながら学んでもらう講座を行い、大学生が手作りした印刷教材を配布したが、知識の定着や講座が終了した後も、詐欺に気をつけてもらうためには、教材の工夫が必要であると感じた。

②目的

本事業では、引き続き、浜松市との連携のもと、大学生が講座を行う予定であったが、新型コロナウイルスの流行で緊急事態宣言が発令されたため代替として、特殊詐欺防止講座動画と特殊詐欺防止ハンドブックを作成することとした。高齢者が自分事として特殊詐欺を学んでもらうことを目的として特殊詐欺防止のために活用してもらうこととした。

③取り組み内容

1. 特殊詐欺撃退ハンドブックの作成



静岡県警察の監修の元、特殊詐欺撃退ハンドブックを作成した。内容は、多発している特殊詐欺についての解説他、詐欺チャートを掲載して高齢者の防犯意識を高め特殊詐欺防止に繋がるような内容で作成した。

2. 大学生による講座の動画作成

今年度は開催予定であった9月が緊急事態宣言が発令させていたため動画で講座を行うこととした。内容は、特殊詐欺について理解を深めるクイズをはじめとし、主要な詐欺について手口や対策が分かる大学生による演劇を取り入れ詐欺について理解を深める為の動画を作成した。

3. 現役警察官へのアンケート調査

新型コロナウイルスの影響により高齢者にアンケートを行えないため、作成したハンドブックと特殊詐欺防止動画を静岡県警察の現役警察官100名に対してアンケート調査を行った。

④アンケート調査の結果

ハンドブックは97%が「有効である」と回答、動画は92%が有効であると言う回答を得た。改善点は、ハンドブックは「情報量が多い」、動画では「見てもらうまでが難しい」といった意見があつた。配布場所の質問では、地域施設などでの配布が多くあげられた。また、大学生との連携は重要かという質問では、96%が重要であると回答し官民協働で活動を啓発活動を行う必要があるなどの意見があげられた。

⑤今後の展望

アンケート調査では、ハンドブック、動画共に有効であるという結果が出たが、いくつかの改善点もあげられたことから、それらを改善してさらにブラッシュアップしていく事が今後の課題である。また、今年度は高齢者対象の講座ができなかったことから、実施にむけて準備とコロナ渦でもできる防犯活動を地域や警察署と連携し、取り組んでいきたい。

からだを動かしたくなる仕掛けとイベントで子どもと街を元気にする！

所属：ぶれぐろラボ（健康プロデュース学部心身マネジメント学科吉田ゼミ）

3年 高橋明子（代表）、小池桃花、高杉凜、石川大和、遠藤郁真

里見莉世、杉本大将、高野裕維、奈良間佳祐

4年 石井らら、井出和歩、大場瑞生、河西りょう、小泉徳果、鈴木唯菜、関野若葉

1. 目的・概要

本プロジェクトを通して、子どもたちの運動機会を増やすとともに、地域の賑わいを創出し、街と子どもたちを元気にしたい。

1. 小学校や地域の運動施設で、子どもたちに運動の楽しさや大切さを発信するとともに、継続的に実施することで、子どもたちの運動機会を増やすこと。
2. 安全に遊べる場を提供するために「イベント」を企画し、実施すること。

2. 事業内容・方法

本事業では、以下の4つのイベントを実施した。

①キッズオープencampus 「未来のスターみつけた」

日時：2021年7月17日（2部制）

場所：常葉大学真和体育馆

対象：Kids Open Campus 参加者 80名（事前予約）

内容：「走る」「投げる」「跳ぶ」など5種目の運動体験と測定及び結果のフィードバックを実施した。



②ストリート陸上@まちなか

「アジャリティトレーニングブース」

日時：2021年11月3日

場所：浜松駅前 ソラモ

対象：ストリート陸上参加者



内容：TOMO RUN 主催イベントで出店し、運動体験のブースを企画・運営した。

③大学生交流フェスタ 2021 「Sports Challenge」

日時：2021年11月21日

場所：アクト通り

対象：大学生交流フェスタの参加者



内容：フリスビー、ジャンプ、パワー、バスケ（協力：浜松学院男子バスケットボール部）など、4種類のチャレンジをスタンプラリー形式で行った。

④健康・スポーツフェス「親子でスポーツ」

日時：2021年11月6日

場所：常葉大学柔道場

対象：健康・スポーツフェス「親子でスポーツ」参加者 20組（事前予約）

内容：親子で行う運動教室の企画・運営を行った。



<地域との連携>

全てのイベントを、他団体と連携して行った。TOMO RUN 様、浜松学院大学バスケットボール部の皆様は、浜松市を盛り上げるための活動を日頃から行っており、一緒にイベントを企画・運営する中で、多くの学びを得ることができた。

常葉大学主催のイベントでは、心身マネジメント学科の学生として、学校と地域を盛り上げるために活動することができた。

今後も、共に地域を盛り上げるために、連携して活動を行っていきたい。

<工夫>

コロナ渦で様々なスポーツイベントが中止になる中、開催するための方法を考えて実行することができた。事前予約制にしたり、2部制にしたりするなど、感染リスクを減らしながら、子どもたちが思い切り体を動かせる環境作りをした。

大学生交流フェスタでは、風船を使用し、子どもたちが自然と運動したくなるような、「仕掛け」を作った。子どもたちは風船に興味を示し、自らジャンプする姿が見られた。

3. 事業成果

①キッズオープンキャンパス「未来のスターみつけた」

コロナ渦で運動実施やイベント参加の機会が限られる中、80名の子どもたちに運動機会を提供できた。

②ストリート陸上@まちなか「アシリティトレーニングブース」

様々な動きを取り入れた運動の重要さを子どもたちや保護者に伝えることができた。TOMO RUN さんと共にイベントを盛り上げ、地域の賑わいを創出できた。

③大学生交流フェスタ 2021 「Sports Challenge」

子どもたちが楽しみながら運動ができる仕掛けを作ることができた。本学の他団体や、他大学との交流も図れ、共に街の賑わいを創出できた。

④健康・スポーツフェス「親子でスポーツ」

親子で遊べる様々な運動を20組の親子に知ってもらうことができた。子どもたちだけではなく、日頃、一緒に遊んだり体を動かすことが少なかつたりする保護者の方にも楽しん

でいただけた。

本プロジェクトを通して、多くの子どもたちに運動機会を提供すること、地域の賑わいを創出することができた。

また、どのイベントでも、体を動かすことを行なう子どもたちの姿が見られ、主催者側の学生も、運動の楽しさや重要性を再確認することができた。イベントを企画・運営する手順や、方法も学ぶことができた。

4. 今後の展望

今後も、コロナ禍で運動機会が減っている子どもたちに、運動機会を提供する活動を継続的に行っていく予定である。また、地域の団体や大学との連携イベントを通して、地域の賑わいを創出していく。心身マネジメント学科でスポーツや健康について学んでいる学生として、浜松市のスポーツや運動、健康に関する問題を探し、解決するための活動を行っていきたい。

連携先：常葉大学、株式会社 TOMO RUN、浜松学院大学男子バスケットボール部、
浜松市内大学地域貢献ネットワーク

からだを動かしたくなる仕掛けとイベントで 子どもと街をげんきにする！

常葉大学 ぶれぐろラボ（健康プロデュース学部心身マネジメント学科 吉田ゼミ）

PLAY & GROW!!

1. 背景

現代の子どもたちは、スマホやゲームの使用時間の増加や、時間・空間・仲間の三つの間の減少により、「外遊び」をする機会が減り、体力が低下していることが問題視されている。

また、コロナ禍により、三密を避けることや、様々な活動の自粛が強いられているため、より運動不足が進行していることが心配されている。

そうした状況を鑑み、心身マネジメント学科でスポーツや健康について専門的に学んでいる学生として、問題解決のために何かしたいと考えた。

2. 目的

本プロジェクトを通して、**子どもたちの運動機会を増やすとともに、地域の賑わいを創出し、街と子どもたちを元気にしたい。**

1. 小学校や地域の運動施設で、子どもたちに運動の楽しさや大切さを発信するとともに、継続的に実施することで、子どもたちの運動機会を増やすこと。
2. 安全に遊べる場を提供するために「イベント」を企画し、実施すること。

3. 実施内容報告

①キッズオープンキャンパス 「未来のスターみつけた」

日時：2021年7月17日（2部制）

場所：常葉大学真和体育馆

対象：Kids Open Campus参加者、
80名（事前予約）

内容：「走る」「投げる」「跳ぶ」など5種目の運動体験と測定及び結果のフィードバックを実施した。

【成果】コロナ禍で運動実施やイベント参加の機会が限られる中、多くの子どもたちに運動機会を提供できた。



②ストリート陸上@まちなか 「アグリティトレーニングブース」

日時：2021年11月3日

場所：浜松駅前 ソラモ

対象：ストリート陸上参加者

内容：TOMO RUN主催イベントで出店し、運動体験ブースを企画・運営した。

【成果】イベントのメインである、「走る」以外の、様々な動きを取り入れた運動の重要さを子ども達や保護者に伝えることができた。TOMO RUNさんと共にイベントを盛り上げ、地域の賑わいを創出できた。

③大学生交流フェスタ 2021 「Sports Challenge」

日時：2021年11月21日

場所：アク通り

対象：大学生交流フェスタ参加者

内容：フリスビー、ジャンプ、パワー、バスケ（協力：浜松学院大学男子バスケ部）など、4種類のチャレンジをスタンプラー形式で行った。

【成果】狭いスペースの中で、子どもたちが楽しみながら運動ができる仕掛けを作ることができた。本学の他団体や、他大学との交流も図れ、共に街の賑わいを創出できた。



④健康・スポーツフェス「親子でスポーツ」

日時：2021年11月6日 場所：常葉大学柔道場

対象：健康・スポーツフェス「親子でスポーツ」参加者 20組（事前予約）

内容：親子で行う運動教室の企画・運営を行った。

【成果】親子で遊べる様々な運動を知つもらうことができた。

子どもたちだけではなく、日頃、一緒に遊んだり体を動かすことが少ない保護者の方にも楽しんでいただけた。



4. まとめ

本プロジェクトを通して、多くの子どもたちに運動機会を提供することができました。どのイベントでも、体を動かすことを行なう子どもたちの姿が見られ、私たち自身も運動の楽しさや重要性を再確認することができました。

また、大学生や地域の方が集まることで地域の賑わいを創出でき、今後もコロナ禍で沈みがちな空気を変えていく一助になれるよう、継続的に活動を行っていきたいと思います。

謝辞 とこは未来塾による本プロジェクトへのご支援にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。

2020 東京オリパラ選手に対する観光情報を通じた相互交流の実践

所属: 2020 東京オリパラブラジル選手ホストタウン交流プロジェクト(村瀬ゼミナール)

経営学部 小山李美(代表) 加藤樹暉 松林真央 宮田玲奈 米坂陽奈 城下祐輔
鈴木悠之助 戸田春奈 山本侑希奈 吉原樹

1. 目的・概要

本学浜松キャンパスが立地している静岡県浜松市は、2020 東京オリパラにおけるブラジルオリパラ出場選手の「ホストタウン」として内閣府より認定されている。同市は国内で最多 9,000 人を越える在日ブラジル人が居住しており、都市部や空港への交通利便性、在浜松ブラジル総領事館やブラジル銀行の立地、その他、交流イベントが盛んに行われている優位性を生かして、地域資源を活用した市民そして本学学生との交流が期待されている。

本事業は本学に来学したパラリンピックに出場する男子ゴールボールのブラジル選手団に対して、浜松市の観光資源に関する動画を製作し紹介をする。ゴールボール選手は、視覚に障害を持たれている方が大半であり、わかりやすく楽しめるようなオリジナルのコンテンツを製作する。

2. 事業内容・方法

本事業では視覚障害者の方でも楽しんでいただけるように浜松市の地域資源や魅力を「音」で発信する動画を製作することにした。その目的を達成するために、以下のスケジュールにしたがって活動を進めた。

① 動画製作に関するアドバイスを得るためのインタビュー調査 :

視覚に障害を持たれている方に対して、どのようなことに注意して動画を製作すれば良いのか、アドバイスを得るために、浜松市健康福祉部の紹介で障害者施設ウイズ半田の斯波様にインタビュー調査を行った。そこで、障害者施設で働く方々の様子や、どのような「音」であれば抵抗がなく聴いていただけるのか、意見交換をさせていただいた。

また、公益財団法人浜松・浜名湖ツーリズムビューロ様に、「音」の収集に協力をしてくれる浜松市の観光施設や飲食店などを紹介をしていただいた。

<「音」の収集に協力をしていただいた施設・店舗>

7月3日 ヤマハイノベーションロード(音楽の街)、7月14日 志ぶき(うなぎ)

7月15日 天竜浜名湖鉄道(天浜線転車台)、7月23日 浜松屋呑兵衛(浜松餃子)

*この他にも多数の企業、店舗などに相談をさせていただいた。

② 現地調査（音の収集）と動画製作：

写真（右）のASMRマイクを用いて、グループ別にご協力いただいた企業や店舗を訪問し、音の収集を行った。その後、動画の長さ（5分）や音の特性を考慮して、以下のような構成で製作を行った。途中に音クイズを入れたり、浜松市在住のブラジルご出身の方に協力を得て、ポルトガル語の翻訳を入れるなどの工夫を行った。



▲ASMR マイクによる音声収録
(ヤマハイノベーションロード)

0.00	0.54	2.21	2.50	3.50	4.45	5.30
オープニング	音楽の街 (ヤマハ)	浜松餃子	天竜浜名湖鉄道 (転車台)	浜松まつり	エンディング	
[ピアノの音クイズ]			[転車台音クイズ]			
←←←←←←←←←←←←←←←←			ボルトガル語の同時通訳			

③ キッズオープンキャンパスにおける応援横断幕やフラッグの製作支援：

上記の他に、松岡浜松地域貢献課長にお声がけをいただいて、2021年7月17日(土)本学浜松キャンパスで開催された「キッズオープンキャンパス」にて、ブラジル人選手の応援メッセージを入れた横断幕やフラッグを子どもたちと一緒に製作した。

参加者のなかには、浜松市がブラジル人ホストタウンに認定されていることを知らない方も多く、啓発活動にもつなげることができた。



▲ ブラジル人選手への応援 メッセージ入り横断幕

3. 事業成果

本来ならば、8月に事前合宿で来学をされた時に、動画を観て(聴いて)いただく予定だったが、新型コロナウィルス感染拡大に伴う緊急事態宣言が発令され、オンラインを含めた交流が「中止」になってしまった。しかしながら、ブラジルパラリンピック委員会、浜松市、本学浜松地域貢献課のご厚意により、ブラジル人選手が帰国後、12月8日(水)にオンラインでブラジル選手との動画配信や交流を企画する機会ができた。この機会を十分に生かすため、動画配信のみならず、音を通じたさまざまな交流企画を準備した。

具体的には、第一に本来の目的である浜松市の魅力を音で発信する動画を発信する。次に、本学に来校した男子ゴールボール選手は、金メダルを獲得したことから、パラリンピックの大会の様子、日本の文化や生活習慣の紹介について音に関するクイズを交えながら交流を深めた。最後に、高校時代に吹奏楽部に所属していた学生がクラリネットとフルートで日本及び世界のヒットソングを披露し、交流会のフィナーレを演出した。



▲ 動画配信の様子



▲ 風鈴を用いた音クイズ



▲ 楽器による演奏



*動画にご興味のある方は、上記の QR コードからアクセスしてください。

交流会に参加をしてくださった男子ゴールボール、金メダリストの LEOMON MORENO DA SILVA（レオモン モレノ ダ シルバ）さんは、「目が不自由で浜松がどのような場所なのかを知ることは難しいが、動画の音を聞いて想像することができました。ゴールボールが金メダルだけでなく、日本を知り、皆さんと交流できるチャンスを与えてくれたことをとても幸せに思っています。」と感想を述べられた。

4. 今後の展開

新型コロナウィルス感染拡大という条件の中ではあったが、2020 東京オリンピックパラリンピック開催という一生に一度かもしれない絶好の機会を生かして、出来る限りの交流企画を無事に終えることができた。パラリンピック選手を迎えるにあたって、単に音で浜松市の観光資源を発信できればよいという考え方ではなく、例えば音の違いを比較したり、珍しい音を聴いてもらったり、いろいろな工夫の仕方があることを学んだ。

また、動画を製作していく過程で視覚障害の方でも個性によって、捉え方が違ったり、異なる対応が求められることも学んだ。

今後の展開は、本事業の「レガシー」として、もっと多くの視覚障害者の方に聴いていただけるようにブラッシュアップをしたり、健常者と障害者の方が一緒に楽しめる動画の製作にも挑戦してみたい。

注) 本事業の取り組みは、中日新聞 2021 年 12 月 9 日付朝刊に掲載された。

常葉大学生の野菜摂取量の増加を目指す仕掛けづくり

所属：ベジとこ（野末ゼミ、三浦ゼミ）

健康プロデュース学部健康栄養学科 菊池智貴（代表） 中村萌 大石凜 矢代晃代
豊島幸恵 高江洲伶菜 藤井 美希 片山理絵 佐藤亜美 田嶋美沙登 松村有那
内山久美子

1. 目的・概要

浜松市では、がんや脳卒中などの生活習慣病の予防を目的とし、若年層の野菜摂取量の増加を促進するための取り組みを行っている。この取り組みの一つとして皮膚カロテノイド測定器（ベジメーター）を使用して、野菜摂取量の「見える化」（野菜摂取量を数値で表す）を行っている。本プロジェクトでは、野菜摂取量の見える化により、大学生に自分の野菜摂取量の現状を認識してもらうとともに、野菜摂取量の増加につなげる仕掛けを行う。その際、人は見たり聞いたりするだけではなく、実際に体験することにより、より教育効果が上がることを考慮した取り組みを行う。本プロジェクト参加大学生に野菜摂取の重要性を学習または再認識してもらうことにより、参加学生のみならず、周囲の人々（大学生、家族等）にも情報が共有され、その結果として全体的な若年層の野菜摂取量の増加に繋げることが期待できる。加えて、浜松市では小中学生にもベジメーターを使用した測定を行うため、小中学生のベジメーター測定の支援にも参加し、大学生よりも若い世代の野菜摂取の現状を学習する機会も得たいと考えている。

2. 事業内容・方法

常葉大学浜松キャンパスにおいて、2021年6月～11月に皮膚カロテノイド測定を323名に実施した。このうち、グループインタビューに同意した39名をインタビューの対象者とした。インタビューはグループ（2～3名）または単独で行った。所要時間は約20分間とし、野菜の摂取状況や同世代、大学、地域などで野菜摂取を増やすためのアイデアなど野菜摂取量増加のための意見を出し合ってもらった。グループインタビューで得られた意見について分析ソフト(NViVo)を使用して解析を行った。また、11月に測定参加者に1日に必要な野菜の約3分の1を取ることができる和総菜盛り合わせを配布し野菜摂取量を学習、再確認してもらった。野菜摂取増加のための仕掛けとして、野菜摂取量増加の啓発のためのロゴマークコンテストを企画し、常葉大学造形学部の学生に応募を募った。応募されたロゴマークについて本研究参加者に投票を依頼し（図1）、啓発活動のためのロゴマークを決定した（図2）。2021年12月に、このロゴマークを大学内の共用スペースに掲示し、野菜摂取量増加の啓発を行った。



図1 ロゴマークの投票の様子



図2 ロゴマークコンテスト 最優秀賞

3. 事業成果

ベジスコアについて、1回目の測定値は320.0、2回目の測定値は331.5だった($p<0.001$)。ベジメーター測定により野菜摂取量の見える化をすることで自分の野菜摂取の現状を再認識することができ、1回目の測定よりも2回目の測定の方がベジスコアが上昇したと考えられた。

本研究により、野菜摂取量増加のポイントは特に3つある。

1) 手軽さ

野菜の簡便化商品に関する販売実態と展開方向によると、野菜の簡便化商品においてもカット生野菜（加熱調理用）では若年層の利用が多いが、調理を必要としないサラダ用カット生野菜（袋入り）やサラダ用カット生野菜（カップサラダ）については、60代の利用回数がやや少ないものの、20代～50代の利用回数にはほとんど差が見られない。¹⁾本研究では、

生で摂取できる野菜（例：トマトなど）・下処理が不要な形態（例：カット野菜など）の意見が多くてた。このことから、野菜は摂取が簡単な形態の方が摂取量の増加する可能性が高いと考えられる。

2) 生活環境

平成 28 年度大学生を対象とした食育に関するアンケート調査報告 平成 30 年 1 月農林水産省 北陸農政局によると、居住形態別では、野菜を「1 盆以上」摂取していると回答した人の割合は、自宅生の割合が高い。野菜を食べない理由について、全体的に「調理するのが面倒なので食べない」または「価格が高いから食べない」と回答した人が多い。²⁾本研究では、1 人暮らしよりも実家暮らしの方について野菜摂取量が多い傾向にあった。上記のことから、実家暮らしでは家族が野菜を購入・調理まで行うため、野菜を摂取する機会が増える。加えて、野菜摂取に対しての意識向上にも繋がるだろう。

3) 環境整備

日本政策金融公庫・農林水産事業 情報戦略レポート世帯構造の変化がもたらす食品購入先の多様化と内食率の低下の実態によると、スーパーマーケット以外の食品購入先はコンビニエンスストアが最も多くなっている。利用者は男性や未婚者の利用が多く、特に 20 歳代～40 歳代の利用が多くなっている。³⁾本研究では、大学生が野菜を購入する場所として、スーパー、コンビニ、ドラッグストアの順で多くなっているため、野菜へのアクセスを容易にする工夫が必要である。

掲示期間が短いことや、学生にアンケート調査を出来なかつたことから、学内に掲示したロゴマークが実際にどのくらいの波及効果があったのか確認することが出来なかつた。

4. 今後の展望

今後、出された意見を参考に、組織や地域全体として野菜を摂取しやすい環境を整えていくことが必要だと考えられる。大学生の野菜摂取量の増加のためには、大学や野菜の購入先であるスーパーなどの環境の整備が必要であると考えられた。また、今回の事業を継続することで、個人及び周囲の栄養状態を良好に保つことに貢献できる可能性が考えられた。

【引用文献】

- 1) 野菜の簡便化商品に関する販売実態と展開方向 <https://www.alic.go.jp/content/000146012.pdf> (アクセス日: 2021. 12. 24)
- 2) 平成 28 年度大学生を対象とした食育に関するアンケート調査報告 平成 30 年 1 月農林水産省 北陸農政局 https://www.maff.go.jp/hokuriku/food/shokuiku/attach/pdf/student_enquete-5.pdf (アクセス日: 2021. 12. 24)
- 3) 日本政策金融公庫・農林水産事業 情報戦略レポート 世帯構造の変化がもたらす食品購入先の多様化と内食率の低下の実態 https://www.jfc.go.jp/n/findings/afc-month/pdf/afc_forum1409_1.pdf (アクセス日: 2021. 12. 24)

常葉大学生の野菜摂取量の増加を目指す仕掛けづくり

常葉大学 健康プロデュース学部健康栄養学科 ベジとこ（野末ゼミ、三浦ゼミ）
菊池智貴（代表） 中村萌 他野末ゼミ、三浦ゼミ計10名

1. 背景

国民健康・栄養調査では、野菜摂取量が全ての年代で男女問わず、推奨量を満たしていないことから、特に若者の摂取不足が大きい。浜松市では、がんや脳卒中などの生活習慣病の予防を目的とし、若年層の野菜摂取量の増加を促進するための取り組みを行っている。

2. 目的

大学生に自分の野菜摂取量の現状を認識してもらうとともに、野菜摂取量の増加につながる仕掛けづくり。
参加大学生のみならず、周囲の人々にも情報が共有され、その結果として全体的な若年層の野菜摂取量の増加に繋げる。

3. 方法

月	実施内容	詳細
5月	測定1回目	大学生の皮膚カロテノイドをベジメーターで測定。323名の方が研究への参加に同意した。各人の野菜摂取量について、測定日に結果を返却。
6月	ロゴマーク募集	常葉大学造形学部の学生に、大学生が興味を持ち、野菜摂取量350 gの摂取を目指せるようなロゴマークを依頼し、4件の応募があった。
7月	測定2回目、ロゴマークコンテスト	大学生の皮膚カロテノイドをベジメーターで測定。 各人の野菜摂取量について、測定日に結果を返却。ロゴマークコンテストに応募された作品への投票を実施した。 (図1)
	グループインタビュー	ベジメーター測定の参加者に協力を依頼し、その上で同意した39名のうち11名がインタビューに参加した。 インタビュー内容については、野菜の購入場所、野菜摂取量増加の工夫など。
11月	測定3回目	大学生の皮膚カロテノイドをベジメータで測定。
	惣菜の配布	研究への参加者に野菜摂取体験のための惣菜（1日の目標野菜摂取量の約3分の1の野菜が摂取できる）を配布。 (図2)
12月	啓発活動（ロゴマークを学内に掲示）	7月に開催したロゴマークコンテストで最優秀賞に選出された作品を学内に掲示し、野菜摂取量増加の啓発を行った。 (図3)



図1 投票の様子



図2 惣菜



図3 掲示の一例

4. 結果

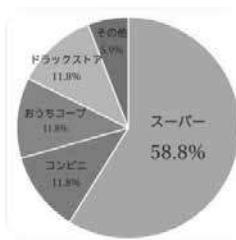


図4 野菜の購入場所

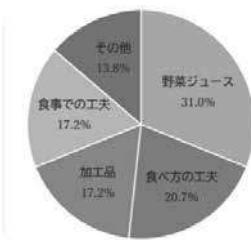


図5 野菜摂取量増加の工夫

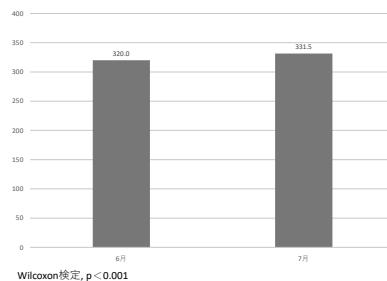


図6 6月と7月のベジスコアの比較



図7 コンテストの最優秀賞

5. 考察

- ベジメーター測定により野菜摂取量の見える化することで自分の野菜摂取の現状を再認識することができる。
→ 1回目の測定よりも2回目の測定の方がベジスコアが上昇している参加者が多かった。

野菜摂取量増加のポイント

- ①野菜摂取の手軽さ：手軽に摂取できる野菜（例：トマトなど）
野菜の下処理が不要な形態（例：カット野菜など）
- ②生活環境 : 1人暮らし < 実家暮らし（例：実家暮らしでは家族が野菜を購入・調理）
- ③環境整備 : 大学生が利用する購買や学生食堂、スーパー、コンビニでの野菜へのアクセスを容易にする工夫が必要

6. 今後の展望

- 大学生の野菜摂取量の増加のためには、大学や野菜の購入先であるスーパーなどの環境の整備が必要であると考えられた。
- 今回の事業を継続していくことで、個人及び周囲の栄養状態の改善に貢献できる可能性が考えられた。

7. 謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただきました常葉大学浜松キャンパスの対象者の皆様および関係者の皆様に心より御礼申し上げます。また、測定後の栄養指導にご協力いただいた、浜松市保健所の管理栄養士の方々にも感謝申し上げます。本研究は令和3年度としては未来塾による助成を受けて実施した。（常葉大学研究倫理審査委員会承認番号：2021-001H）

■静岡草薙キャンパス

〒422-8581 静岡市駿河区弥生町 6-1

TEL. 054-297-6100(代表)

教育学部／外国語学部／経営学部／

社会環境学部／保育学部

短期大学部 日本語日本文学科／保育科

大学院 初等教育高度実践研究科

国際言語文化研究科／環境防災研究科

■静岡水落キャンパス

〒420-0831 静岡市葵区水落町 1-30

TEL. 054-297-3200(代表)

法学部／健康科学部

■静岡瀬名キャンパス

〒420-0911 静岡市葵区瀬名 1-22-1

TEL. 054-263-1125(代表)

造形学部

短期大学部 音楽科

■浜松キャンパス

〒431-2102 浜松市北区都田町 1230

TEL. 053-428-3511(代表)

経営学部／健康プロデュース学部／

保健医療学部

大学院 健康科学研究科



常葉大学
TOKOHA UNIV.

発行：常葉大学 地域貢献センター
発行日：令和4年3月9日
URL <https://www.tokoha-u.ac.jp>